

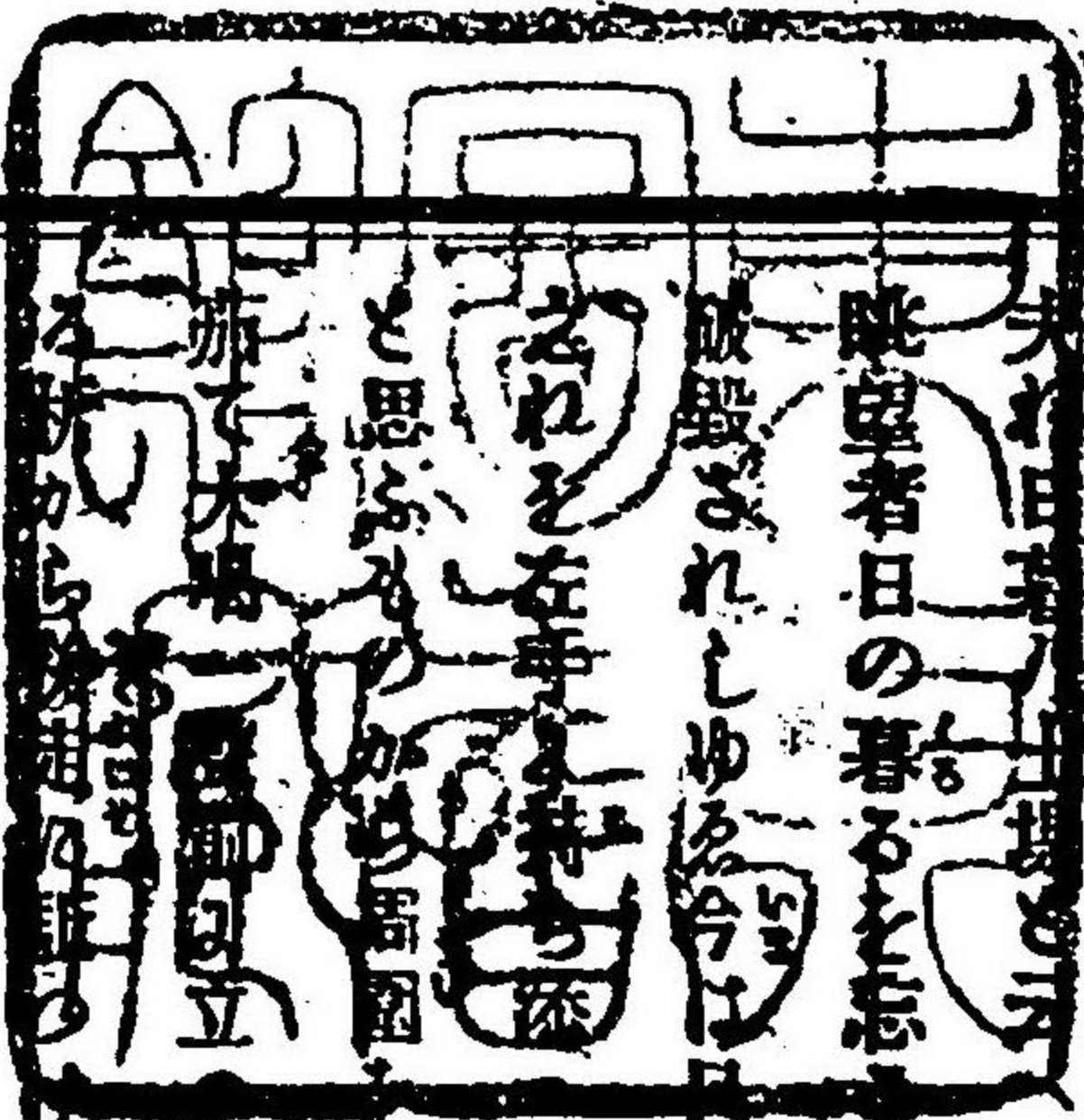
特 43

63

子  
野  
田  
太  
夫  
殿



其廿九 環海十三年三月四日 岩崎之付 199



夫れ日暮りし時と云  
 眺望者日の暮るを忘  
 成毀されしゆる今は  
 之れを左手に持ち添  
 と思ふものか 岩崎  
 赤木場 環海十立  
 本所から海野の陣  
 り来りし海野主計が斯と看るより鎧をしおひて飛走つて右手の腋腹骨  
 も徹と刺貫く 註計は聞ぬし鎧術の名人宛も豪氣の次郎吉なれども此一鎧は固り果て此と其  
 場へ倒るれバツンと云ふより大勢が寄り蒐つて鎧の如く切さいなみて命を断しは無慈悲とい  
 ふも餘りあり喧駟勇ハ一の匹夫あれど其の精利は鉄石乃如く忠義の爲ゆには命を度狭より  
 も軽くし今日日暮りし土堤此露と消て果敢なく成り行きしは寒く遺恨へき壯者あり馳て亂暴  
 者は打果たる旨岩崎へ通す 此者は如何なる者かと取調見しよ全く河窪孝太夫の家婢と

く兄駒勇と云へる角力なりと言立まよ岩崎の意の衰え再び吾野心を洩れ聞き此舉動に及びしならん斯る奴さへ知ると識りては容易に油断はなり難まど私に怖れを懐くものから故に憤怒の体を顯し重々憎くき浪籍かあ以後恚る暴卒者の懲戒の爲めあれは渠が首を切つて鼻木せ



よと鶴の  
一聲離一  
人否む者  
あく唯々  
諾々竟よ  
駒勇の首



を野に晒し執權岩崎肇へ對し乱暴及及びし科に依り斯の如く鼻首せしむる者也との捨札をさへ添たれど志ある者は駒勇が舉を近き櫻田の義徒も劣らぬ通れ日本魂のなと駭く賞讃あま居たり不題同國津和野の町に西林寺と云へる梵刹あり此住持教具は元渡邊なる岩崎氏が父主殿の弟おれど幼年より武道を嫌ひ深く佛門に皈依し十一才の春西林寺の前住教阿和尙に徒弟となり其れより道心堅固にして鶴の林の茂きをまき登の嶺の高さを仰ぎて出離生死の西の道を修する事最と切なるゆゑ遂には同寺の後住となり遺徳の奉は陪々高うりけ

り近時と津和野を立つて近國近郷を行脚し此ほどより故郷濱邊に滞留して村々の民を教化し居たりしが今日しも神谷村へ赴き其飯途城下盡頭の刑場へ投かり彼の話説は次回も記さん

其三十

再説教員和尙は近時濱邊の城下へ出て専ら人の評判を聴くも自身が爲めには錫香りける岩崎肇が先君の妹花子を妻と賜りしより其威勢漸次に高く驕奢の意を生じ君家を輕蔑して威制專横に及ぶ所なく志士の竊み之を憤怒ると雖も亦奈何ともせず術を知らず偶々諫言を容るゝ者あれば忽ち苛酷の罪科を處し其家を絶ら之れは反して阿諛仕ふる者の貪婪を興へ金錢を領ち妻子富貴を處り香艷衣食に飽くの榮あり爾れは澆季の人心滅岩崎が門に編て宛然一國の目も異らずと曝々するを見聞につけ教員和尙は只管々嘆き吾岩崎家は當主の祖先若近無監殿より數代を侍士して君寵も密ならず况て兄主殿が精勵の功より甥輩へ委けなくも妹子を降嫁させ玉ひし其高恩はまた莫大あり然るに當主の幼稚に在すと奇貨を斯く人口は増大するまでも我威に慕り専横を恣にするこそ弊事なれ吾今慈界の俗塵を離るゝ身

ありと雖も御當家の爲め岩崎の爲め捨置べきもわらざれば罪に違ふて背せざるまでも教員さんと教員は有禁血筋の情誼も深く稍く其所存を決せしなれど教化に違わらざるゆゑ一日二日と経過しよ此時月は山の端を出て晝をわさむく秋の夜のみ取さし芒原の中央へ晝を設け鼻し首を看るより教員歎息し如何なる者かは知らざれど偶得難き人界に生じながら身首を異し斯淺ましくも野面に曝され一族の名を汚し未來の地獄の苛責に遭ひ浮む瀬とてはわらざるべし開もまた如何なる者なるかと傍へ立寄り携へ持ちし小提燈の明りも遠し晝札を下し見るも這の什生岩崎肇を討んとして斯る鼻首を處せられしと稍くも讀得たりしかば教員の太く駭きは是れ素一個の忠義の徒にして必竟肇が惡逆を憤怒のあまり擊殺せんとすの此に至しあらんが不幸にして其志望を得ず反て暴卒亂臣此名を被りしこそ悼しけれ亡者の宙宇も迷ふあらんが今此教員が道ふを聽け岩崎肇が汝を斯る刑に處せしも雖も其身も此刑場乃露と消長く醜名を世に痕めん其時はまた汝こそ眞個の忠義顯れて千載の下も美名を遺さん盛者必衰會者定離因われれば必ず果あり努々心残さず成佛せよと懇切に首を向ひて回向しつ涙を揮ひ立去り去後乃話説は次回も記さん

有恸し程も教真和尚は翌日を竣ちて急ぎ岩崎の屋敷に到りて面會致し度旨を申入れまゝ折よくも主個筆は存館にて斯と聞くより立出まで立出て道へ伯父公は能くこそ来ませし誘どばかりも前より立ち案内をすれば教真は衣の袖を揺りながら背後に属く打通れば且此方へと請老入し座敷は綱代天井の裏を裏みて長押床間北風流なる金唐木將て造り出し細度また俗ならずして文珍房具益裁の勿論琴棋書畫所狹まで飾り立しは恸る遊興の席と見たり庭前を眺望は常盤木の間に初紅葉を顯し假山へ究て高からぬと芝者丸が須彌山とうつし秋挑の稍く紅みして西王母が三千歳を羨ます其他渾ての物好疎れり竭せる壯觀美麗看るよつけても教真と人の風聲の虚ならざるを漫ふ教老ある折から衣服を更め岩崎の其座へ立出て兩掌を突き伯父公は先頃より津和野を立つて雪城下へ杖を曳かせ玉ひま趣きい當家より御附屬として西林寺へ遣ま置たる近藤勘助の昨より報知來り早速御伺公も仕つるべき筈なれど御旅宿とても判然ならぬに意外の無禮の儀重きも浮容救の程願ひ奉ると賤説は教真容体を正し俗塵の火宅を離れ三界を棄あしとする沙門の倦へ無沙汰の詫よ及ふべきか

は其よりは其方こそ改心あして先君と亡父主殿の兩墓前へ御賸説を申まで切腹せよと思ひがけあき伯父教真の辞を筆は心憤り。仔細も告す切腹せよとい伯父公の仰とも覺申す不肖あがらも一藩の執權職たる岩崎壁君家の御爲をあらざる外は容易な合は衆知まど道ふ所熟々教真は打諦観て落涙あし君恩の高きを思へば冠山も數ならず御仁慈の深きを思へば石見の海も比がたし然るも其方花子の方を降し賜り妻となし郁之助を出生なまてより此降幼主宮丸君を蔑ろよし容易ならざる企謀ある事人の識らじと思へども速まも世上は流布なして聞もうたてき事どもあき熟々其方の行爲を觀察するに浮める壁の危きを知らず古人謂る事わり邪の如く快樂を淫酒の穢れたるに耽らかして魔業の火坑に陥る事を知らず古人謂る事わり邪智よまて焚り且指むものけ隣れる家の貨を筭て燈火に寄る虫の如く快馬を不及の愚も勞もて五慾の海底に沈む事をおもはずと其方が今の一言君家の御爲なりせば命を棄るなるべけれを其の命を棄常國安穩の道を謀るべし昨日烏走駒勇とやらんが暴卒に及びし其起因も非除他人は知らじとするも此教真の疾も知る石上川の鹿花亭に散らせし落花涙霜の密書は吾掌に入つたるぞと云はれて駭く岩崎壁須臾辞もあかりけり

登時教興復度遣ふやう。常津津和野より當國へ杖を曳き郡中を經歷せらるうち石上の川上より樵夫舟船便を憑み花を眺望て下る折から彼隨花亭とか呼びなせる酒樓の頭へ來たりま時迥く看仰る高樓より飛散りて吾頂きし笠へとまゝ一通の書翰は世にも恐ろまき逆謀の件を認めたる主は確く岩崎肇イヤキ云はぬ前もそ左も右も伯父の口から明白に此の極きを申し出でておぼゆる減る岩崎の家名其れゆゑ速かき切腹せよと今勅に伯父の懇懇耐れども件の密書に對し其疏の語あらば説明せよと汝の所存も一點の疑たゞなくは非除世人の惡評ありとも伯父が代て辨解せんまた分疎立難く切腹なして君父の遺訓へ悔悟の意を表するもその個の武士といふべけれ返答如何もと教興が鋭き言詞に岩崎は黙念として居たりしが元來奸佞邪智の聚信と惡思を決せしか宛然と首を仰げ。密書御家に入しとわれバ今更右左に陣するの甚だ卑怯に候へバ只仰を拜受し父の墓前へ於て潔く切腹仕つるべし伯父公又は死後の儀を宜敷御執計ひ下さるべしまた今生の御乞服勞々寄願ふま富丸君へ拜願を願ひ不忠の御賠償申し上げ奉つらんと如何も既往を懺悔なしたる動靜を見ゆれば教興は

七十四

喜悅おし其心底を決せしめ國家の爲め賀すべきなり岩崎家の儀ハ教興が身は任據して相續し恙なきやう哀訴せん努々所存を變ずる勿れと涙とにも説き諭し切腹の日を定めなバ城下本町ある吾旅宿百屋金助方へ報知來よと其期を終りて立あがれば玄關前なる式盛まで見送る肇ハ太息吐き馳て座敷に歸り來たる其夫の動靜を伺ひて次の間は在りま妻花子は其の場へ立ち出でて傍へすり寄り。思ひかけなき伯父公が密書を拾ひ玉ひしとの真個の事にて候ふかと道へバ肇ハ打頭點句如何も容易ならざる密書を常津石上へ花見乃際流れの川へ落したる其仔細といふは愧かしながら簡様へ云々なりと河窪此未亡人道乃をバ斬殺したる彼の休爲を物語れば花子を太く駭きて然る大切の密書を所持し浮意見ありまは道理香がら其御諭論伏し郎君又は御切腹ある御所存なるか句道は愚なる尋問かホ斯まで企謀し我本望非除伯父公の諫言あるとも容易に變心なすべきか句其れでも只今父君の墓前に於て相果ると潔く御返詞ありしにあらすや句夫れを苦肉の謀計を施すべき吾所存なるゆゑ伯父を欺き飯せしなり句而てまた郎君の御所存は句アナ音高し靜にくと制しながらも四下を看廻し花子の耳よ口さき寄せ零時啼き居たりけり

有恙しほど岩崎の妻花子の聲より何事か密意を言合られ翌朝疾を起て従者一人を召連れ  
 微行は教員が旅宿なる百足屋金助方へ赴き竊に對面の儀を言入れまゝ教員は何事やらんと  
 法衣に着替坐室を請へ今は甥筆の妻と云へ正しく前君左近將監殿の令妹なりと思へば其  
 待遇を厚かりしが花子の稀く聲を低め妾今日御旅宿へ推参せしは伯父の公へ密々聞えわけ  
 願度事ありてなり刃は解更しく稟さずと知食す如く御當主富丸君の未だ御幼少にて在  
 ます爲め公儀向此事は御分家たる鳩森公が御代理遊ばされまた本國の事は所天稟が不肖な  
 がらも御名代を仕つりわりたるが御聞及びわりしかば知らぬとも富丸君の先頃より御不  
 例は渡らせ玉ふゆゑ諸士は心堅大方ならず典藥の餘々も晝夜詰切り御用藥を勤め進らすれ  
 ど今日に至るまでと更に効なく白すも如何の事あれと御世來聰明な在ると申しわぐる程な  
 らぬバ太く妾も氣遣えく其れと申すも血縁の恩愛一ヨも速く御本殿に趣かせ進らせんと思  
 ふより此ほど御容体を窺ひよ具殿致せし親しく御座へ召させられ熱々湯容子を看奉つる  
 よ如何にも餘ほどの御衰弱なれど御所爲は更に平常に異り玉のす爾れどと夜も入とば必ず

御惱烈しくして甚だじき時は物に狂ひせ玉ふかと思ふばかりと御侍女衆の噂を聞き妾情々  
 察するよ這の全く物怪ハ崇ならんと然る舉動の有るや無しやと取調えよ先づ頃御庭前を御  
 遊歩の折ふ一最と年経たる一疋の蟻蛙か御園の池に飛入らんとすると見認め玉ひアレを射  
 よとの君命にて扈從奉りし戸塚民彌が御殿より志半弓を將て蛙の真中を射たり。故蛙は  
 其場は落命なまゝが不思議や蛙の疵口より一條乃白氣立昇りしが忽ち富丸公の御身も震し  
 ど見るや直よ君には物々怖ぢ玉ふ景色にて直に御寝所へ入玉ひ其よりしての御不例なり  
 ど承まはつて考ふるよ全く其蛙こそ口碑を傳る彼御園の池の主にして數百年を経たるなら  
 んよ君が益なき御一言にて命を浴せし處より祟りをなすと存するなれば所詮藥餌乃力にて  
 の御快方ある様もなし只道德堅固の賢僧が行力修法によりて物怪を退散なすに如いなしど  
 思惟する折から伯父の公の當地は杖を曳き玉ひしと聽いて嬉ましく御旅宿を窺ひ知りて参り  
 しなり何卒君の御爲めに御修法ありて惡魔退散の祈禱を願ひ申すなりと胸の刃を押かくし  
 宛も眞個しやかに述べ立てし此段落の譯ハ次の行に記載すべし

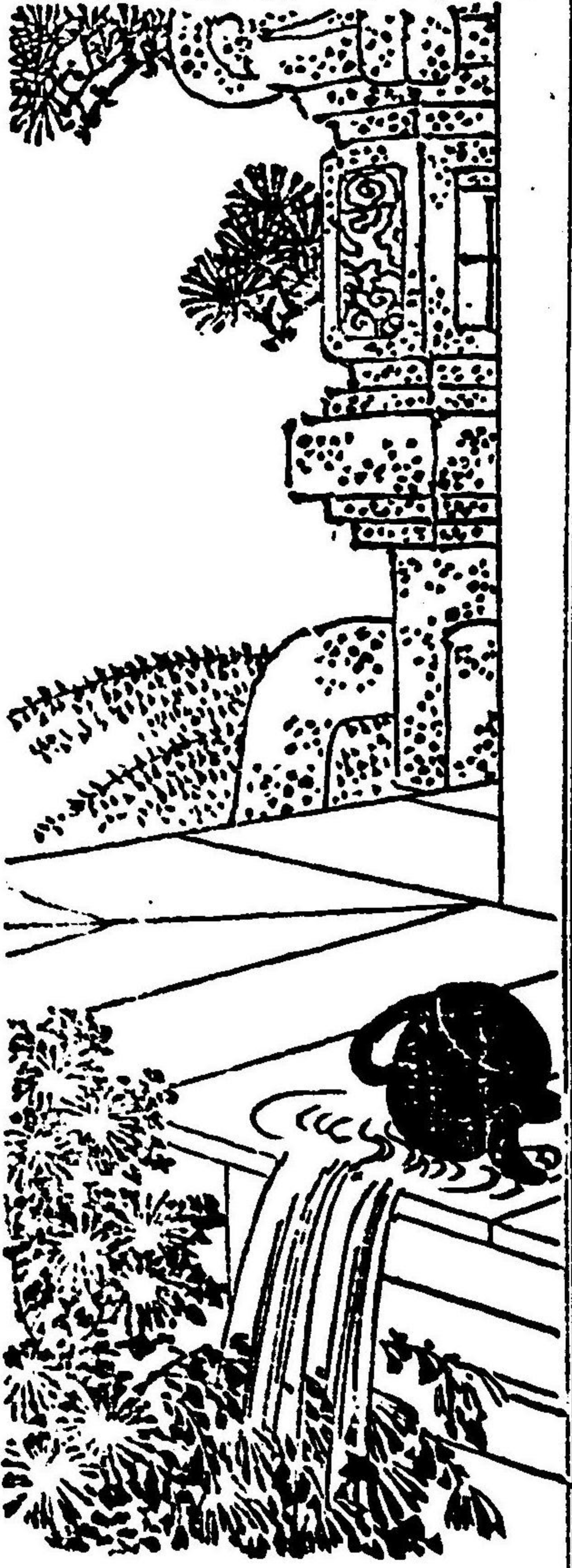
夫れ君子をバ欺むくべし廻ゆべからずと賢者此いひけん寔は然り岩崎肇は妻花子と謀略を  
さづけ富主富丸君の病氣の物怪の祟りなりと教具へ告げさせ此の障碍退散の祈禱を言入れ  
まよ教具

は肚の裏  
よて思ふ  
やう吾摺  
よ甥肇が  
反逆の其  
子郁之助  
を富家の  
嗣子と志  
權政を恣  
まゝにす



へしとの

所存より  
出てしと  
思へば花  
子よも同  
腹ならん  
と推せし



よ昨日肇へ説諭せし切腹の事をも知らざるを見ぬ故々富主の御病氣御快復の祈禱を使續に  
來られしをそ全く二心なきよ極つたを斯知るうへの富丸君の御病氣平癒の修法を行ひ其効  
驗曠ろからて御全快わつたる後甥肇が助命を願ひ退隠せんと有禁は血縁の愛着よ渠等夫  
婦が奸計に陥れらるゝと知らず竟に花子の辭を信ぜ侍儀をく位頼を承陪なし濱邊乃城  
の御園内なる池に年經る蛙の棲みえは最も口碑に云ひ傳ふる處と雖も富國の領主へ對し爾  
る崇を爲すどの以の外あり元來何程に怪蛙ありとも奚ぞ正法に敵する事なるべきか仰



の如く退散の修法をなさば忽地に御平癒あると必定あり爾りながら吾本寺に於て執行すは易けきと路を距し事あればまた三日四日を費さん其れよりは貴家の一室を拜借なして修法すべし憚りながら飯邸のうへ壁殿へも其子細を御語りて御準備ありたし善は急げと申すなれば明日より祈禱の檀上り一週間を以て満願とすべし努々貴家も御慎みありて血を看る事を思ひ玉へかしと尙百般又修法の用心を説き聞かせしゆゑ仕舞たりと花子は心よ歡こぶものから色も顯さず臆て歸邸をなしたるうへ此趣きを壁へ語り籌策充分なれりと教真が指示の如く檀を築き準備萬端整ひし折から翌日又至り教真は法衣を正ましく入來たれば壁夫婦は出向ひ設けの一室へ請入るるを教真は更め壁に向ひ昨日花子まで傳し如く一七日の祈禱訖るまでは堅く血を見る事を忌なれば足下も克々身を慎み必ず短慮あるべからずと其れと云いねど切腹を禁むる伯父が仁慈の辭も壁は心よ冷笑へど面も見せず拜承の様子をあして居たりけり恚て教真が一室に入り檀上るを埃ち躑て吩咐置たるよか鹿田屋の乾分九郎藏をはぎめ四五人乃乾分等は此一室を悉皆釘づけにして恰も瘋癲人を拘禁志が如く出づる事さへ慥はずしたる壁夫婦が所存の裏の若殿の病氣平癒の修法を云ひ立て

其三十五

一室よ入れ終り教真を餓死させて悪事露顯の根を絶んとしたるよて寔に恐ろしき所存なるが宛も堅固にして徳徳賢じき教真あれど斯く毒策の術中へ陥れられまは甚と痛むべき事あらざるや

單表西林寺の侍士は近藤勘助と云ふ者あり元は岩崎主殿(壁の父)の用人たり近藤勘右衛門の一子なるが幼年の頃より多病にまて所詮武家奉公の成り難まど父の出来を遂せん望よて當時主殿の舎弟教真が西林寺の後住となりしを幸ひ同寺へ委ね遣つたるの勘助が十八歳の頃なるが然るに勘助は性質正直なれども左右は輕躁として學ぶ就けども記憶に乏まら自己より年少なる離僧侶が除み進み昇ると雖もまた之を遺憾とも思はず師に對するも更又意とせず恚て之僧侶の勤行の覺束なしと恰好侍士の暇を乞て下し者有たるを將て其後役となし召使居たるか勘助は却て之れを甘ん立働く事も精悍しければ遂に其ま下男門の取締をぞさせたりける有恚ま後住職教真が濱邊地方へ杖を曳きし後二月餘経ちたる頃岩崎方より尺牘を以て教真和尙の身上に付き申談すべき事あるを汝早々出張せよと告げ來た

りまゆゑ何事やらんと勘助は早速濱邊に來り岩崎の邸へ赴きしよ花子は夫れと聞くと  
 纏て一室へ招き入れ聲を低めて道へる様。其方を故々咎責せたる用事と云は伯父教儀どの  
 は先頃より若殿の御病氣平癒祈禱の爲め當邸内の一室に於て淨修法中なるが既に一ヶ月  
 餘を経ると雖も一滴の水一粒の飯だも食し玉はず斷食ありて壇上を下玉はねど其氣丈も常  
 ら替らぬ誦經の聲然れども折々勘助を呼べよと沙汰爲玉ふも俄も其方を呼び寄せしなり  
 夜に入りなば一室の襖を穿ちし穴より其方は機嫌を伺ふべしまた此藥こそ若殿より下し賜  
 る神藥なれば水も用ゑて差わぐべ志兵衛等乃事は家内にて取扱かふ者も多くあるをれど淨  
 法にかゝらせ玉ふ以前に決して他人の來るを禁すと堅く戒め置玉ひし事なるゆゑ故々其方  
 を呼びしあり如何は氣丈もせよ一月餘りの御斷食嘔吐疲勞ありしなるべし此淨藥をさ  
 へ進せなば假令一年二年の斷食ありとも淨身も障る事なかりし去りながら此淨藥を若殿より  
 下し賜ふしと云ひては平生の淨氣買恐れありとて淨服用なきかみ測られぬは道は其方が津  
 和野より持來りしと申あげ是非とも淨用のあるやうに申進めるも淨爲めならめと云ひつ  
 差出す紙包を渡せば勘助も驚き若殿様の御病氣平癒の淨修法の趣きは先頃頃の間

報知よて疾く知りまが淨斷食とは思ひかたず仰の如く今夜御伺ひ申し上より賜る此淨藥と  
 其れどは云はず進せんと欺かるゝとと露知らず正直一途の勘助が纏く自己が休息所へ立歸  
 りたる後の話説は如何ならん

其三十六

再説近藤勘助は花子の手より受取し紙包の一葉を水に混じて器に入れ日没なば飲儀も飲  
 ましめんと待居たりしが其性急卒の男ゆゑ該藥の入る器を過つて取懸せしに水は流れて様  
 を避ひ咲乱れたる秋草の花は濡れは道は什生忽ち蒸み枯菜とありし穢の不思議も駭く勘助  
 合點ゆかすと器を把りあげ復座する白菊の花に濡れば是も同玄く範規じて枯しほみ色と  
 失ふ体あるよと正しく毒の含みし藥と曉りしものから不審を起し爾るも何が故も斯る  
 物をバ飲ませよかしと御新造様の吩咐なりいか何よもせよ心懸りは主人の身の上と思へば  
 其日の没るを待ち聞き置たる奥の一室の修法の檀へ近づき見るよ時如く一穿の穴はあり  
 し故維かんめりと内を覗けど護麻の煙りの際隠たるのみ裡ある教儀の有無さへ定かならぬ  
 ば聲をかけんとする折から一室の内より勘助くと呼ははるよと嬉しや御無事で在せしか

と穴の邊へ身をよすれば再度救愼の聲きよて否とよ吾の筆夫婦が惡逆無道の奸計に陥り終  
命の斷つたきと國を念ひ君を憂ふる其一念の鬼となつて汝の來る日を候まぞ此守靈の  
裡より國家の大事に係るべき甚と大切の密書ゆれば今より汝此家を出て江戸表へ赴き在  
勤の家老松倉丹下に手渡さるべま甲夜汝に密薬を興へて吾を殺さんと謀り筆夫婦は國家を  
考はんとする逆臣をり吾一念の冥鬼となつて此あるを故生居ると心附て汝を呼びしる自  
から逆等が惡事を露顯させんと神明佛陀の妙智方所謂大の配劑たぞ并と吾の筆が毒計は權  
とし事を語りたるの當邸へ召み來て修法し就きま其日にわれと最早助かるべうよなきを信  
り筆等夫婦か天誅よ加はる日まで當殿の息災無事を祈ん爲め身を犠牲に一七日の修法を竣  
り舌を斷ち新命なせと此密書を松倉丹下へ渡さん爲め未だ存命居る体は冥鬼となつて故ら  
よ汝を此へ呼び寄せしは此儀を告げん爲なるぞや許々吾意は背くなく忠義の道と忘るゝあ  
卒とばかりよ穴は裡より差出たたる守靈を勤助手疾受取りく楯の貴納は然る森前に覆り  
圧ひ最早此世に亡御身よ候ふか始めて知りま當家の旦那また伊新造の伊新造を納め毒を  
進せんと思ふが爲めよ私を遙々呼なされたの他人の手にての水一盃貴納が飲なさらぬ

ゆゑ死んで浮坐るを浮存命と思ひ詰ての計略か反て其身を亡滅玉と取とありしも天罰なら  
め主人筋とは申さながら御國の爲にの替難ければ是よ直に江戸へ赴き此守靈を持參なし  
松倉へ訴へ出で貴納の浮怨みはらし申さんとは云ながら伊新造しいと欺けバ救愼聲克く不覺  
ハ嘆きに遅々なまて見認められなバ一大事疾々せずやと云ふうちも漸次く一層細りばつ  
と燃立つ陰火の光りと思はず裡を覗き看れば血染む顔は瞋りをふくみ合掌のまゝ控上  
へ此と倒れし景状は今と全く呼吸を閉ぢ悶存久しくなりしなるべし勤助は稍うよ涙と禁め  
身準備をし精悍しくも堀を乗り除け同家を脱出ま江戸屋敷を南投て予趣きける

其 三 十 七

武藏國と下總の國を流るゝ隅田川と稱ま昔はいざ知らず架たる橋は兩國と名のみ存して今  
ハ一も江戸第一の繁華の地西と東へ往秀の絶陸際なき強生れ空人の出盛る未刻下り廣小路  
ある見世物小屋の屏風より年未だ若き女の順形甲乙看廻し立出て、物珍らしさよ迂濶く  
するうちお作さんを見失ふたが國とは違ふて大層な此賑しい人中ゆゑ何程捜しても見當ら  
ずユリヤ奈何したら宜からうと彷徨折から元柳橋の方より一步は高く一步は低く聞元さへ

も定まらず兵兵あがら來蒐る武士に思はず確と衝突バ酒に酔たる癖とまで脇に角立て目を  
 瞋し看れば乞食は分際で兩刀抜む身共と對し無禮をなすは憎くい敷と威丈高なる權勢に彼  
 順禮は大地よ手を突連れの者を見失ひました故索探す心を奪れ且那様の彼陸を努も存  
 ぜずツイ疎忽を致ました真平御免下さりませと道ども武士は色々肯す否々堪忍は相成ぬ察  
 する處其方は此雜沓の中を働く那の拘盜とか申す者であらう婦女と思ひ油断をさせ茶町人  
 の眼を瞋そかは知らぬとも兩刀帶せし身共八品を奪んなどは大膽千両詰人の為めおれは  
 手討又致すと刀は柄に手を掛れば女はいよく駭きて衝突は卑女が如何もなう浮座り  
 まそれと決まて貴官の品物を盗まうと致す者では浮座りませぬ御覽の如く此笠と配せし卑  
 女の國所石州濱邊の城下在父母と別れて姉妹が西國路から廻々と順禮をして菩提を吊ふ者  
 昨日當地へ着はしたと西も東を分りませぬゆゑ知已の者が兩國に居るのを便り又索て來  
 る道此賑しい往來の中にて何時の程にか伴姉を見失うての當惑と心配をしてをりまする  
 折柄なれば盜とする拘盜とやらしての浮座りませぬ願御免下さりませと賄詫と更も肯入  
 れずかさよ掛つて罵りながら咄嗟刀を抜かんとする此時武士の背後より人押分けて立出

は姿風俗も人目立つ華美なわれと華美あらして標致も年も二九から今柳橋の歌妓と慶價  
 高き志女吉と云ふ歌妓者あるが手討よすると立際ぐ件の武士を押禁め難かと思へば伊東さ  
 ん此兒を切るぞと紫痴らしい其種を申儀は廢よして妾と一緒よ青柳さんへハテ人立がして  
 見つ共よくないコレ順禮の嬢様は妾が引受るから此擧はずと早くお出と地獄で佛の仲裁に  
 女は歡ひ志女吉を伏拜みつゝ立ち去りし後の話説は次回又記さん

其三十八

氣にいらぬ風もあらうと柳かき其系筋の柳橋同朋町の中央に表へ掲げし提燈は小登代と記  
 せし藝妓屋の内よ母とも思しき者が火鉢の傍に差俯向き藝妓と對ひ壁角立て。コレ小  
 登代先刻から此様よ口を酸やくして饒舌て居る此返事の無のり不承知な乃かへ、餘んま  
 り不承知なぞと大きな口利かれまい今更云はずどもの事だけれど和女が忘れて居るか  
 を知れないから云つて聞かせるが全体和女は田舎者然も江戸からい二百里餘の石州とか云  
 ふクヤノ育ち以前妾が津和野様のお邸奉公の頃懇意よした野晒熊次と云ふ男が吉原へ連  
 れて行き娼妓よ賣ると話た玉の和女を見るよ標致あり姿なり廓へ嵌るハ殺生と隣志女吉

さんの母さんよ相談して野晒の方を金で仕切り宅へは連れて歸つたもの、且ても病でも泣いてばかり様子を听けば那の人に欺されたと云つて碌々よ妾小殿もうけぬゆゑ果は妾へ業が熟へ窓廓へと思つたのを志女吉さんが禁めた後和女よ意見を以て呉たので稍と坐敷へ出之爲たきと厭ふ詭言を入釜四釜に稍う此ごろ一人前の江戸藝妓らしくあつたの、誰の庇護だ志女吉姉さんの引立てと此母が苦勞ぢやぞヨ其れも是れも宜旦那持たせて妾も左胸扇樂をしやうと思へばあそ那の志女吉さんの旦那松倉秀雄様の親旦那丹下様は濱邊の旦那の伊家老様其秀雄様と御朋輩の伊東甚之助様が世話をしくやらうと仰しやるもの、酢の危弱はと得心せぬは餘んまり氣儘が過ぎやうせ和女も石州生れだから伊東さんのお氣にさへ惚つたぢら未だ獨身の若旦那御新造なり奥様よなまゐるは和女の腕次第故郷へ飯りも出来やうから應と云つてお心よ随ひなコレ泣て居ちやア判らぬ其個よ地烈たい強情者だヨと煙管で邊を叩き立て眼に角立て罵るの何處も同老藝妓屋の熊野婆と知られけり此時隙子一重を隔し奥よの一個武士が獨酌をしてありけるが聽て其場へ立ち出で、小登代の傍よ坐を占めながら。コリヤ小登代如何致されたものダ去年梅川よて不圖面會した阿好女だと思つたゆ

る松倉生の愛妓ある志女吉ふ尋問へバ妹分の小登代と云つて石州生れと聞いて一層念が増し是非とも吾よ周旋せよと度々志女吉への頼りども風よ柳の其日送り只得養母へ直つたよ此相談を爲のけたれた今も老母がいふ通り不肖ながらも濱邊家の用人頭伊東甚が長男廻坐勤めの此甚之助和女が應といふ時は母俱侶に安樂よ暮させやうといふ所存十二や十三の未開女ではあしコリヤ怨を知悉を知と一なだれ懸バ顔を仰げ母さんなり貴官なり御深切なれ旨詞ですが妾は如何も其色バかどく句フムスリヤ是れほどよ申しても句伊東様のお心よは靡かぬと云ふのか句死んでも卑妾は厭て御座んす句エ、いけしぶとい然う吐かしやモウ丁簡がど立ちかゝる折から表の椅子を披け句母さんまた十八番か子句オヤ志女吉姐さんサアマア此方ハ

其 三十九

東兩國よ名を高く青柳樓の供部家よ仲間体の一個の男と對ひ合ふたる破落戸体の男の煙草を煙らじぢから「何様で奈何逢ふか知れぬエから悪い事は出来無よと云が買はれた前に江戸の地へ出會さうとは思はなかつた然して今ハ岩崎の邸よ前ハ居無エのか」深し様子

を知ら無エから然う思ふのも無理ぢやア無エが實は前が河窪の娘は登代を野酒の權次と  
も引擧つて往つた跡で惘然や那の道乃の岩崎は且那の手は罹り敢ない最期を遂げたゆゑ  
河窪此家も斷絶同様また驍勇の且那が登城の飯りも亂暴しかけたなれど討詰められて獄門  
となり吾はまた且那から内意をうけて江戸邸へ仲間奉公に住み込んだの自然且那八郎がわ  
つたら直ぐに知らせる隱密方首尾よく邸へ抱はられたうへ今ぢやア松倉丹下と云ふ岩崎様  
とは抵抗す且那の家も仲間奉公耳を追つ立て探つて居れど未だ金儲けも成さうを注進口  
も目つから無エが今日も此へ來てゐる若且那の秀雄と云ふと親父と違ひ際あつたら遊興  
が好て柳橋の志女吉と云ふ藝妓も馴染屋々ど通つて來る處から偶より吾が供より親父の  
ハツをば合せてやるので近頃は自信仰々此處靜なら何んでも今も會儲け口を閉めてはらう  
殊なれ國からはまた近頃岩崎の且那の同志と听た海野主計様がけ府をしたから孰れ己等も  
相應御用の出來るも極て居るが然してゐ前は何處も居ると問れて徳は頼み手を置「尋ら  
れてオイソレと鏡吉も何だか極が悪いがね前も知つて居る所を岩崎の且那から頼まれ權次  
とゝもに河窪の娘を引擧へし出かけた夜淵す驍勇が那の娘を連れて飯るを見認めたゆゑ途

も待ちうけ喧嘩を爲かけ擧つて行うとする處へ何處へ行のか是れもまた來越る駕よ三人が  
躊躇うちよた登代が乗つた駕の走るを追つかけて權次と吾と斬出したが驍勇の今一の駕艇  
をお登代と思つたか其跡を追ひ往つたゆゑ此方は充分思ふ坪尾張の熱田か岡崎當りへ賣あ  
かさうと協談したれど玉が宜から吉原へと權次がいふので適々と江戸迄共に出掛た後以前  
權次が懇意だといふ藥研堀の熊鷹婆アお勘も頼み賣らうとまたを面を見てから吾の方へ引  
取度との掛合よ一時も早く手放して肩を脱けやうとお勘婆アへ賣渡し其金を山分よして  
野晒は直ぐ故郷へ歸つたが吾の綽号の狸々野郎朝から晩まで飲つつけ其うへ部家へ入り込  
んで好な賭奕にまた元の空阿彌となり詮方よし今ぢやア兩國近邊を破落戸てめて吾家へは  
折々出入をして居るが前も逢ふたア不思議な縁と話説も餘念なき折から次の一室も看替  
をせし藝妓は耳を察して二人の話を聞き居たり

其 四 十

當下仲間手も把りし猪口をしたみて徳へ獻し「其れぢやア權次は飯つたのか吾が國をバ  
出る頃にヤア未だ屋舗へは面出えしぬエが孰れ何處で引籠り飯りを忘れて居るのだらうが

然うまで那乃河窪の娘は其後何處へ嵌られたか「熊鷹と云ふ渾名のある婆の事は余命函を差つと寝かせちやア置めへが吾も少々其婆に不義理な事が重つて居るゝて些とも敷居を跨は爲無エが何んでも娘と此土地から藝妓になつたと云ふ事、汝も餘つばと迂闊ぢやア無エか何番財腹の惱ね玉だと云て何處から何と云ふ藝妓もあつて居ると云位は穿鑿をして置がいゝや其れやア然と汝も是から心懸ると宜金儲の口があるが何と一口乗ら無エか「金儲けなら何事でも決して厭たア云はねエから奈何いふ言だか听かしませへ大きな聲ぢやア云へ無エが曾て鹿田屋の乾兒もなり岩崎の旦那手先もあつて御用を勤る汝だから儲けを分て云つて聞かせるが實は旦那の伯父も當る津和野西休寺の住職敷具とやらが旦那へ何か意見をして邸の内にて祈禱中勘助と云ふ若黨が國から和尙を訪に來て當夜和尙を殺し國許を出奔一たが設江戸邸へても出かけて來て餘計な事を饒舌時は旦那は勿論吾等まで何んぞ難儀もあるかも知れ無エ汝も所々を彷徨から設石州者と聞たなら穿鑿をして吾等の方へ度ぐよ報知も來るがいゝ其年齢は恁々なり其容貌は云々と岩崎方より告げ來たりま仔細を語り隔きて萬一其奴を引捕へ強情張やア擲き切つて跡腹腦め無エ構ふすりや旦那の方から帶

を諦た奢美の金が來のだから努すぬからぬ様よまると云折柄に次の室から雷樓の下婢が聲をかけ「勝平さん旦那は是から船で向島邊へ入らッしやいますからお前さんは先へた邸へた歸りませつて毎もの様頼むと仰まやいままた然うして是は志女吉さんから歸り途で煙草でもお買下さいと乃事ですと差出たしたる拾り紙の内は何程か知らねども勝平へ受取つて今夜も何うせ櫻田の浮上屋舖へは東束香からう茅町の浮中屋敷へ御泊込みと親旦那へ其首は吾等がバツをしませうお光さん志女吉さんへ宜しうと程々徳へ眼で知らせ兩人齊一身を起き準備をせしめて歸り行きし話題轉頭奥のまた松倉秀雄は黄昏まで遊興をえて照る月を肴し船を泛べんと裏手に繫し家根船へ乗うつれば送り出る兩人の藝妓は志女吉と今一人は小登代なるが志女吉は小登代の耳へ口を寄せつゝ何やら私語小登代ばかりを船へ入れて左様ならばと無聲を船頭は心得てもやいを解いて漕出しけり

其 四 十 一

月もよし語も首尾をまつの邊漕上り行き家根船の裡には秀雄が低聲よて情は卿は河窪の息女登代よてありけるか然う承まいきバ何處やらよ見覺ぬのある様なれと父丹下が江戸結合

を申 附られ家族を纏めて出府したるは丁度十年跡なれば種々熟知あり難し爾りながら先  
 頃より石州生れと云ふ事は志女吉よりも聞きしかど果敢なく横死を遂げらるし孝太夫殿の  
 娘とは知る事なれば今日までの無事を野上玉へかまふ爾りながら卿は海に船母入爲り家  
 出をいたるは其れを船母が厚き慈悲にて全く姦臣岩崎の謀み乃底を探らんとの深き所存の  
 ありしならんが其事さへも成就せて渠が毒手も罹られしは昨日志女吉が仲間より聞きしよ  
 よつて始めて知れり孝太夫と云ひまた船母まで盜賊不義の汚名を被り刺さへ非命に死せま  
 は之も前世の約束ならん幸ひも卿世に命あるなれば父母の怨をいらして河津の家名と  
 興すが肝要ぞや常表よ於て岩  
 崎の野心ある風聞は曾て聞けど  
 孰れも確証を得たるにあらぬバ  
 容易に糺弾もな法難く然るに近  
 時同僚たる伊東甚之助が舉動よ  
 不審の蘆の多きのみか頻に壁へ



親密の往復ありと聞き込みしゆ  
 る志女吉に申合め渠が卿へ懇慕  
 を奇貨周旋あして奥底を探らん  
 ものと存ぞとあれと命にかけて  
 も甚之助に靡かね卿が決心なり  
 と志女吉が吾への物語其れゆゑ  
 實に今日卿を説諭のうへて甚  
 之助へ周旋せんと青柳より聘き  
 し折も恰好も吾仲間勝平が岩  
 崎よりの犬あし事また卿が母  
 公の最期駒勇とやらんが不慮の



横死特には伯父を殺害せし勘助とやらが行方を索るまでの義も卿を伺引せし懇々徳事まで  
 も具し志女吉が立聞て吾へ云々と告げたるよぞ直ぐ引捕へて取組さんと思ひはまたれど熟



考するも高の知れたる仲間や下郎を押へて證據立せば反て大事とありもやせん其れより  
卿を説き色に事寄せ甚之助が筆に同意の奸計を探り出するそ良策あらめ故と志女を  
柳も残し大醉の体よて船を出ださせ卿へ説諭と思ひの外卿の口から素性を明かす  
めは身を汚ま甚之助の意も隨がばんと先を越えたる其言詞は察する處志女吉より疾くも  
委細を聞かれかしと問へば小登代と顔をわけ茲に説き出譚は次回に

其四十二

お登代の小登代は聲を低うし「卑妾が身の經歷は开も此營業にある始り志女吉さんを姐と  
頼と披露をしたる其時實の恚々云々と眞個を明して姐さんへお頼み申して置ましたれど  
母が横死といふ事の露聊かも存じませぬゆる素性ばかりは誰殿も努す明して下さいます  
あど諄々頼んで置きましたるが今日湖らずも青柳よて姐さんが立聞は詳細知れた末の操動  
聲に違はず岩崎が謀反の處を探究んと貞女と破り後を憂ひ卑妾へ奇く語り玉ひし母も敢ま  
く筆が爲りし御最期ありしうへからは卑妾も河窪の娘身を棄て岩崎へ荷擔の奴を探り出だ  
し父母は汚名を雪んと心を定め志女吉さんよ仔細を告げしよ姐さんも實の旦那は今夜お前

よ譚を頼むと仰しやつて遮は催す上手行他問を憚る大事の話をきるのは船が屈竟と頼り  
も随ひ愧かしい此身の素性をお明し申すも平生忠義は母親子とは父が語てとりましたゆゑ  
お絶り申えて母の仇岩崎が惡事の証據を取押へたから父の仇も直ぐは知れるて御座りよ  
せう仍つては貴官の仰をまたず甚之助の心も隨がひ色で盡し確なる証據を取つて見せませ  
うと云へば秀雄の大は欣ひ其れてあそ亡父母の汚名を雪ぐ良策あれ斯段々も岩崎の惡事露  
顯の緒端をひらけば臆て惡人誅し御家の榮を見るは目前只岩崎は先君の御妹を賣ひ  
うけとせどなし居る事なれば疏忽の手向ひなま難し吾々親子また御後見ハ鳩翁公よと御心勞  
なり卿が這回の機亂よて首尾能伊東が所存を探らば渠も一味の海野主計を共に捕縛し糾問  
なをべし努す油斷致されを尙も隔居たるうち船の疾くも向島なる植半の棧松へ着にけ  
り小登代は秀雄を誘ひて先づ樓上の坐敷も通り酒殺を命じて再びまた酒宴を開き其の坐  
敷へ間の襖を密と開けてやをら入來る船頭が祝儀の禮を述べながら前後を看返り語り出す仔  
細は抑も如何なる事か次回よくわましく説出せし

其四十三

腰を屈めて入来り去松頭ハ兩掌を突き「お喚もあきよ御座敷へ失禮も参りましたは頂戴致した御祝儀の御禮代は礼人様へ申し上度事があつて只計りよては御分知も御座りますまいが何を包し申ませう私しも石州生れ而も濱邊の御城下盡頭(せんとく)に當日暮しの小百姓卯太郎と申す獨身者畑仕事(はたけしごと)の片手間は植木師にもなりませるゆえ今回御家老が御新築の御別館の人夫も参り出懸る筈で居りましたが生憎病氣よかつたゆゑ拒絕たのはいまで思へば私一が身ハ大儀伴同(おほいさま)じ植木師の彌之助は人夫とあつて行し爲りど之とより當話其の二以下其の十四乃編まてに記載せま如く彼の彌之助が御別館新築の普請小家を扱出だせし事を落度とし受負人鹿田屋忠五郎は責殺されまた彌之助の亡靈が妹へ横死を告たる事同人の母あらくの死去岩崎が妹までにも其罪を科せんとするハ立腹ある事を傳へ聞き大坂なるおらくは弟嘉作の許へ妹辰辰を伴ひ行かんとする途札の辻(つじ)に於て駕を取違へ追ッかけ行し事由を語聞かせバ小登代ハ傍より聲をかけて「成ほど其夜妾もまた駒勇は誘はれ人眼を厭へバ蕪(わ)も乗り渠が住居へ急がんと控(とど)つたる札の辻野晒(ののしろ)とかいふ悪漢(あくなん)が妾を奪ひ連れ行かんと駕を止めて乱暴(らんぼう)浪蕪(なみの)竟(ついに)妾と悪漢の手は奪はれて今の身のうへ「其御様子ハ船の中よて且

那樣への御物語を測らす聴いた此卯太郎は夜私(わたし)が手に入つたの今も所持する此煙草入其まゝ拾つて蕪を退ふたが何う行途を問違たやも更(さら)に蕪は追ッ着かず故手がりりもど煙草入を檢め見しは裡にあつたる手束の宛名に確(た)どの知れれど今夜岩崎様からの御願(ごん)よて例の娘を引置へるから必ず吾が内へ来よ昔尾能玉さへ手に入つたなら孰れ江戸まで遣き出し女郎(ぢやうらう)よ賣て二ツ山と認めありし一通ゆゑ再はあたつを連れて行くのを早くも知つて乃此手廻まか爾すれば可憐(かわい)や爰より遠き江戸まで往(ゆ)き苦勞(くろう)をすへし私も一旦の乗りかゝつたる世話(せわ)甲斐(あ)も此まゝあたつは逢はぬ時(とき)の深切(ふかき)どかゝ俱々(くぐぐ)勾引(かきま)たるものであらう、疑(うたが)はるゝも遺憾(いざな)なれば非除(ひじよ)力(ちから)に及ばずどもあたつを苦界(くがい)へ沈めさせて死なれた兩人へ辨(わ)まぬ譯(わけ)此手束乃文言で見るどきの必ず江戸に居るであらうと例の娘とある文は卿(きやう)と知らねたつたの事と思ひ詰たる茶像(ちやざう)より大坂へを立寄らす直ぐ此江戸へ参りませたが奈何(いかん)索(もと)ても更に分らず聊(ちやう)か所有(しゆりゆう)た貯(たくわ)への金さへ悪者(あくもの)池(いけ)ひ費(せ)ま只持口(ただぢくち)入(い)の宿(しゆく)を願(ねが)み手馴(てな)れた業(わざ)の植木師(うゑぎ)へ暫時(しばらく)僱(ひ)はれてをりませしたうち柳橋(やなぎはし)の日野屋(ひのや)の内へ僱(ひ)れた後宗(ごせう)旨(ち)違(ちが)ひも此業(このわざ)を致(いた)さするも國(くに)に居(ゐ)るところ眼(め)さへあきバ沖方(うきはた)へ流(なが)れ出るのを好み松濤(しょうたう)く業(わざ)とバ知(し)つたる徳爾(とくに)れども索(もと)る其人(そのひと)よ選(え)

近ねバ旦夕又心を勞してをりましたが先でる伊豆屋の客とハ高橋邊まで迎ひの仕事で永代橋をバ下る折から雨はとてども影を射す月の光りも川中を看とハ正しく婦女の死骸も投と知れば棄置れず松を漕つけ腕をとり引揚げ見るも未だ死んで間のない事か胸のほとりも暖まり乃ある容子ゆゑ直ぐ橋際へ船を差け同船夫を走らせ醫者を招き此時始めて婦女の顔をよよく見ますればモソ索るあたつて御座りまたといふも秀雄もた登代も駭き面て其れよりの如何せしかと兩人齊一同ひかけたる此段落の次回に説べ

其四十四

登下卯太郎復道ふ様「思ひがけなきあたつての死骸も私をも大喫驚百般介抱と致したゆゑ箱く正氣も復しましたので客の迎ひは同船夫も頼み直ぐあたつてを其最寄の知巳の家へ連を行て爾て仔細はと問ひました。渠も測らぬ再會も嬉し涙も暮れながら語るを聞けば彼の奥は卿様と取違へて駒勇どのか宅へ連れ行き定めて私を来るであらうと二日三日と禁りられし折からとくどのが来て河窪の後室様は御家老の爲めも敢なく御最期を送りられしと聞くに彌駭きし駒勇なりとさくどのは確に仇は岩崎様と知れてはあれと下賤身で容易を

事も云へまいから是非とも卿を索出してと協議のうへさくどのと俱も順應委とあり西國筋から諸國を練巡り先ごろ稍々此東都へ上つた當日兩國までさくどれを見まひ彷彿折から生酔武家も日逢つて既ての事手前もならうとした處を美華お姐さんに教けられ其はに免して貰うたが西と東も知らぬ地までさくどのは難れし事ゆゑ是から向を何うしやうと羨し進出した女氣から前途なき町を陣降うち日の暮果て氣も鬱り死ぬのが増してわらうと永代橋から飛び込んだと詳細様子が知れままたゆゑさくどのと云ふ卿もは家も仕た女中も此江戸も來てゐる事と分りましたが何分何處も居らるゝ事やら殊より卿が河窪のお嬢様までありまるといふ承さるるまで私にも知らねばお話申しませぬとあたつてのは馬喰助の知巳の時へ預けて置き専らさくどとの所在をハ索まていをれと今も知れず爾れど話せば一ッ一ッ事件の紛れから自然と茲もさくどつて来るのも全く岩崎様の罪をハ天の情み玉じ悪事露罪とかいふ事でありませう今もそれさくどとの所在が知れたら久し振にて主家來の盡きぬ話説ふ松田様の悪人退治ハ肝要な手續きもありませうとおもふたわら無遠慮も此の傍坐敷へ参りました罪にお免し下さりませと一伍一什を卯太郎が語るに聞い

て欣々秀雄就中お登代はおさくの事を聞くに一層喜かしく殊に彌之助の妹と聞けば是非とも逢ふて何くれと話問ひたき事もありと嬉し涙乃様子を見たり秀雄は兩人は打向ひ聞けり聞く程薄命なる其人々が江戸の地へ聚り来るも御家を思ふ忠義の精神よよるなるべし是より船を兩國に歸し小登代の其おたつとやらは匠會なして國の事情を聞き糺したうへ許々も伊東の事を頼むなりと馳て同家を立ち出て、兩國投て下りけり話問後登代近藤勘助の歌眞が預命をうけ守靈を所持ま濱邊の城下を去り夜を日は繼ぎて江戸表へ志投せしが遠州路よ於て測らざるも大病も罹り身體自由あらざるのそか有語を發す事たは難く心憐れど死人も同然曠まき空舎に滞留させまが翌月の下旬に至り稍快方ふ赴きまゆぬ道中は路傍は幾るゝとも江戸の屋敷へ着するまでと一歩も脚を止むまじと心を決し程もなく東海道を下りく品川近く名に響く鈴が森へと投かゝりしは夜の守刻も近き頃あり此時森の屏風にてアレヨ〜と聲するの正しく婦人の叫ぶなれば合黙行がじと勘助と思はず脚を止けり

其四十五

夜と更たれどさへ渡る月に四下を信度看れば海邊真近き數へ一個の婦人を押轉がし二三人

の暴漢が手把り脚把り今既に強姦おさんとする体なれば勘助の大に駭き憎き賊の暴動かな大事を抱ゆる身よてはあれども目前婦人が危急の場合打棄通るは無慈悲の限りと思へば少まも猶豫せず腰を帯たる旅刀の柄を手をかり逸散し走り行きて聲高く涙蕩者々と云ひながらメラリト抜いたる刃の光も夢中よなつたる暴漢の仰天なまて捉たる婦人を手放さ遣出だせバ勘助の五六間追蹙け置く跡へ戻り乱れし姿をかいつたらふ婦人の傍へ立寄りく女中ヨ悪漢は追ひ斥けたり爾れども茲も長石せば又彼者等が大勢にく出懸て來んも測られず少しも早く余どもよ家ある宿まで至たられよ此場の様子身のうへ其うへ所かんと急がし立つれば婦人の左右の辭さへ嬉し涙よかきくれながら勘助の跡に属ひ馳て品川の驛へ入りしよ子刻過ぎゆる各戸も起きたる氣色なけれども了得の五十三驛の家はじめなる土地柄だけよ煮賣酒屋の店ををしまばて開いてあるを幸ひと勘助は該家へ入り店の間乃奥の方よ且座を占て婦人に向ひ余は至急の要を帯て江戸まで赴く者なるが卿の難儀を見かけしゆえ選漢は追ッ散し無難も茲まで伴ふたり此末卿の行方まで送り届けて進たけれど今いふ如き急ぎ此身なれば卿の茲も夜明けを待ち其後出立するものとよけれ心焦く中にて聞ふよも及バ

ねど开も卿は何國の人か看れば笈摺を被らるゝからの願願も廻るならんが如何なる事にて  
 今夜の如き災難に遭ひしか語られよと甚と深切なる勘助の詞に婦人は涙を揮ひ命の親とも  
 申すべき貴族の事ゆゑ身の素性と藏すずお話致ませう卑妾は石州濱邊の城下駒勇とすそ  
 相撲取の妹よて名をバチ作と稱  
 者なるが少し索る人の有て同じ  
 土地の娘ともにもに西國路より  
 々の海山を踰ぬ月日をかさは稍  
 く今日東郷へ着き母方の親族の  
 者が兩國邊よりまよるゆる其  
 れを便りに出懸げ志道にて伴の  
 娘を見失ひ甲處乙處と捜しまし  
 ても何處へ往たやら皆くれ知れ  
 ず只得親族の其家又落着たらへ



索んと其處まで行きし親族の  
 者も今は江戸にのゝならずて頼  
 みの綱も忽ち絶て途方に暮てを  
 りままたを傍へ居た駕丁が如さ  
 ん誰かを捜すのかと尋られたよ  
 力を得て實に年齢云々の伴の娘  
 を見夫ふて常惑まますと話しに  
 其娘なら先刻から此邊等を呻吟  
 て居たが恰好吾等の仲間が早認  
 め今其家へ連れて往たからマア安心をせるがよいと道いれて卑女も嬉まこの中よも早う逢  
 度と思ふ心を察してやら吾も是から其宅へ用事があつて出かけるのだからと前も一柱に夾  
 るがよい何うせ擔いで行く空駕に乗て行かうと深切な辞の巧計のある事と知らぬバ浮架と  
 其駕へ乗つたは全く卑妾が油斷向方から何方を廻つたやら更も知らぬと夜も入つて先刻の



所へ駕をあろすと信号と見なてまた一個點漢が来て引提へ伴の娘は逢はせてやるから其處  
 心て三人の云ふ事を听けと押へつけ泣けと叫べと詮方も竟手込め遣ひまする處と地獄  
 で佛の食郎の御救け此御禮は中々口では申し切れませぬ其につけても案ざられると伴の  
 娘の身のうへまで設惡漢と欺かれ妾の様な災難に遭ひはせぬかと今とありては吾身の上よ  
 り彌ままで心がへりでなりませぬと通ふさへ聲を泣かせて啣ち救けバ勘助は世よは不思議  
 な事もある者何を藏さう余もまた卿と同芝石が濱邊仔細あつて近年は同ト國なる津和野よ  
 わきと其駒勇け事も知つて居るが然うして卿は本國を何時出立をせらるしかと尋ふた作は  
 國を立つたる時を語れば勘助は打點踏て復問ひ出す其趣きと此繪の譯は次回又記さん

其四十六

勘助は復お作に向ひ其頃出國したとあれバ兄公の長期は知らずやと問へバお作は打駭き  
 泣兄さんが死なましたとはと云へバ勘助點頭オ、喫驚に道理だ其仔細は箇條く其動靜は  
 云々ありと岩崎華を討んときて望を遂げず積死を志し首級を野邊に棄されしきて一伍一  
 什を其語れば餘りの事涙も出です宛然無抜けの如くなりしを勘助は慰めて然うして卿が

索るといふ其人とまた如何ある者か包まず仔細を語られたなら不肖ながら協力になつて俱  
 々索てあげませうと道はれてお作の精う顔を仰げつゝ、堰き来る涙を揮ひもめへす道へる  
 やう其御深切あるお辭にあまへ申すも如何の辭をれと兄が積死を聞くうへ、眞實をお話申  
 しますると是より河窪の家の事變お登代が行方探索の爲め諸國を巡る趣きを陳ます陳ぶれ  
 ば勘助も再は然うかと駭きて然うきくからは余がおを明して卿に語るべしと西休寺教員が  
 現存切込岩崎の毒手に罹り最期を遂けたる事また其遺言より密書と所持して江戸邸へ上  
 る道遠州まで病氣を罹りし頼末を低聲ながらも具に話し此うへ、卿も俱々江戸邸へ赴き御  
 後見たる鳩翁公か爾なくバ松倉丹下様へ余が訴へ出ると同事は河窪様宛の汚名を駁刷な  
 すこそ宜からめと慈悲にお作の罪と嬉しく伴の娘は今申す彌之助と云ふ者の妹ゆゑ一同に  
 居たなら欣びませうと行方しれぬは是非もあしと打聽るれば勘助の其娘の事も御家老の松  
 倉様へ願つた後卿が索る河窪のお嬢とにもに搜索して懸て對面も出来るあるべし不案内な  
 る土地の事ゆゑ且卿が探着先の出來たるうへまで余もまた盡力なさんと頼もしき辭も萬事  
 を委ぬる折から一番鶏のうたふ聲も卒とばかりは勘助の茶價を興へ該家を立ち出て掃聴

西の久保ある上屋敷  
 の邊へ若たりしかおさ  
 くの勘助へ心注けてい  
 ふやう江戸屋敷よは鳩  
 翁公を始め奉り松倉松  
 といふ忠義乃御方が御  
 坐るなまバ岩崎方の  
 人のあるべき様よは思  
 はねど邪智には長し  
 國家老取も一味の輩か  
 ありて貴郎の事を聞き  
 知つて國へ内通する時  
 は如何なる計謀をする



かも知れず迂濶に御屋  
 敷へ推参よりは鳩翁公  
 がお邸より御上屋敷へ  
 の御越と道まで待受々  
 直々よ浮観へお願申す  
 方が大丈夫だと思ます  
 が貴郎の何んと思召と  
 と云はれて勘助確と手  
 とうち成るほど是は宜  
 い處へ氣か注いた其意  
 見に随ひ鳩翁公へ直訴  
 を爲やうと謀し合せ一  
 通の書面を認め同翁が



其自邸より西の久保なる上屋敷へ参駕の途筋に赤羽根の邊りて橋戸より向かひて竟に直訴をまたり志が鳩翁公に其の書面を披閱ありて扈從の士を招き何にやら下知を傳へられ勘助おさくの兩人を其の自邸へ連れ行かさせ禁出を禁じ置き懸て上屋敷へ赴むかれ歸邸の翌日腹心田邊又太郎を以て兩人を尋問さるる其趣きの且く投給又懸し次回も分身するを听べし

其四十七

却説田邊又太郎は鳩翁公の命を受け勘助お作の兩人を尋問の内室へ押さ人掃ひのうへ直訴の趣意を糺せしに勘助は且自身の手帳を陳べ其より西村寺教具の辰辰と記し岩崎聚の爲めに横死の顛末お尋死せずして其の多危をまひ勘助を聘さしを卒大婦に是を知らず教具は毒藥を與へんとせしが設つく庭官へ器を倒し草花林淵みし事また教具の懸命より其場より逐電したるまでの不技不業を上申すまた昨夜鈴ヶ森に於ておさくを扶け其素性を聞き識りしゆゑ俱々直訴及びし趣きを述べ訖り懸て教具より受取り來りし該書面を指しだせばおさくは河窪家に在し日の事變より今日までの經歷を具言上またりしよぞ又太郎の選一又聞き取り是を案記を彼守書の紐とくくと把り出だしたる一通こそ石上川にて教具が

拾ひ去密書と知られたる又太郎の離度毎に日憤り且懸り辭徐し兩人へ道へる横教具法蘭が主家の爲めは此密書を其方に手渡しするまゝ冥目せず悪奸を欺かれは了得り岩崎主殿の命弟あり其血統までありながら君恩を忘却し國家を横領せんと謀る榮が所存を憂ひべきまた其方が能く主人の命を奪ひ遠路を訴へ出でたるの諺々も感心あり追て御沙汰のあるまじで他人に接するを禁じ外出を留めらるゝなれば暫らくのうらぬ袖を耐へ命を待つこそよけれ將さくとやらんも追つて尋問ふべき事もあれは勘助と俱々休息すべし今申し立たる者太夫の娘時代の所在も猶御後見へ伺ひの後取計ひ信度搜索かし遣はすべしと亡恤も厚き又太郎が辞ふ兩個ハ獄びの眉を開きて退出志田邊の指圖ありたるか邸内の監察詰所へ兩人を入れ男女の事なればとて夜の別室に臥さしめ最と鄭重に待遇されたと懸て又太郎の尋問の趣きを具し鳩翁公へ上申し彼ハ密書を差出だせしよ不同公も大に駭き玉ひ榮が果敢不審なりとは曾て丹下と申し談玄居る事なれと斯る大事と巧計べき者といふ今まで知らざりし此上は丹下と協議を遂げ速かゝ處分すべしと翌日上屋敷へ參られ別室に於て丹下と密談數刻ありしが如何なる事よか至急の着手も早く荏苒日子を経過し居たり此時は是松倉秀雄が眼



てより伊東甚之助の心底を探らんと密に父丹下にも語り居たる折あれば丹下と此事を勘  
 公も告げ願くば伊東海野の兩人が悪事の種を聞き出だし是を捕へて証人へ備へ面きて聲と  
 捕縛とべま其れまでは秀雄へも勘助れさく兩人の事を頼み置くあそ宜からりと兩氏の聞よ  
 決議をし爾るまでも若殿は御身氣遣しけをバとて御用人上成荒木寅之助並河津刀八兩人へ  
 屈竟の部下三十名を附屬せまめ幕  
 府よりの命より海岸防禦を名と  
 し出立させたり憚る折なれば勘助  
 れさくへ其後何等の沙汰もあく日  
 々の徒然を憂ひしよ既より前号中に  
 も記載せま如く小登代乃お登代は  
 卯太郎に案内せられて彌之助が妹  
 辰辰にも面會なし國の動靜またあ  
 さくとも諸國を經歷て當地へ



來たりし一伍一什を聞く人も語る  
 も涙のみなるが此うへと俱々よお  
 さくの所在を索へしと互に愛きを  
 慰めて小登代ハ其より松倉秀雄  
 へ約せま如く伊東を蕩えいよく  
 一個の密書を得る其赴きは給様  
 譲り次回へ續いて分解せべし

其四十八

有恚しかば藝妓小登代は國の爲め  
 また家の爲め父母の耻辱を雪がん  
 には身を捨てゝあそ浮む瀬わらめ  
 と尋思を定め甚之助へ送りま文は心意もあらぬ情をまゝと書認めたる事なれば伊東  
 は之を讀むよりも虚言ありとて争か思ひ毎よりも一際立派な着飾りて兩國の或茶亭に來



り早速小登代を聘きしよ此方も一層華美に粧ひ纏て同亭よ赴きて毎よもあらぬ細と呈し先  
 つ頃よりかずあらぬ妾へ嬉しい仰せ言有難過ぎて眞實とも思へぬほどよて貴郎入意を測り  
 かねしは聊小坐奥の慰みものよあさるてあらうと故と強固申まは爲たれど志女吉姐さんへ  
 細々と仰せのあり志が眞齒おれバ卑妾もしみく嬉しは故お目よかいつて御禮も申し此末  
 どもに御情を蒙る所存て御座りませから二世も三世も替らぬといふ御誓言を聞かせて下さ  
 い其が卑妾の願ひですよと身を寄り添ふて口説立つれば甚之助の精神の宛然恍惚とて吾  
 を忘れ小登代の肩に掌をかけたながら今さら已に誓言とは餘り疑々り過るてあいか和女ゆ  
 るなら命まで棄る覺期である小可然し安心せぬとあらバ何んな誓言誓紙でも望にまかせて  
 認めやらん然うして和女の望い何うぞや。卑妾が願ひの誓言の其體を物では御座りませぬ  
 貴郎の御身よ大切と思ふて御坐る品物を卑妾へお預け下さりませまた卑妾の方でも大切に  
 思ふ品をバ貴郎の方へお渡志申して使きますから別に是ぞと云ひませぬと貴郎が平生紙盡  
 の裡と大切に扱われますのが那の裏への何品も大切な品があると思へバ其れを預けて下さ  
 りませと道へバ伊東は打點頭成るほど紙盡れ裡もあるは最と大切な書類あり然し和女が持

つたりと何の益もならぬ品其れよりの小可が秘蔵なたる此印絶た結へ珊瑚は八分球  
 。否々其ん亦品物では正可の時よ金よじやうと藝妓根性の卑しい盟ひと人に嗤笑するも厭  
 ですから卑妾の方に益はななくとも貴郎の爲めに大切な品をバ預けて下さいなど望むは毎に  
 紙盡れ裡よ納し一通こそ仔細あらめと思ふよりの所望と知らぬバ甚之助は爾まで預けて具  
 よとあるから預けられと大切に書類であれバ和女涙り決して他見の無用なるぞハ誓言  
 よ預つた大切な品を他人よ見せる其様を呆氣た卑妾でも御座りませんから安心して。如何様  
 其れも一理移り然うして和女が預ける品は。卑妾が盟は此守裡よは織戸の観音の像母の記  
 念の笹鶴錦今日まで肌身を離しませぬと貴郎の心よ随ふうへの云ハ本夫と思ふゆえ卑妾  
 よ代つて是からの貴郎が大切に持つて下さい。成るほど曾て志女吉から附に聞いた和女が  
 秘藏笹鶴錦の守護とやら如何にも承知致した此うへはしつほりど杖列べて心の紐と解け始  
 めた後互乃品を盟代とよ取替さん冬の袴短し寝て語らん勝どはかりよ手を把られ消も入り  
 度心地なきとも早九分九厘手よ入り志密書を取得ぬ事ありては秀雄へ堅く保証し辭も立た  
 ずと氣を取直し屠所の羊は其れならぬと思はぬ人よ勝はれ屏風の裡へ入りたるの最と憐む

へき事ながら開も河津が横死彌之助が非業の死も固是を登代が彌之介へ懸幕をせしよ起因  
し事よ今恚る悪漢の爲めよ身を汚がさるゝも全志操の堅固あらざりて報あるべし

其四十九

往古より英雄豪傑と稱さるゝそのすら大事も随みて絆を誤るゝ多く女色の上におれば況て  
や凡俗の徒の色海に感溺するは枚擧するも違わらず宜に慎むべし再説伊東甚之助  
の其身門閥の家を生れて分外の秩祿を賜ひ何不足赤き身にてありながら海野主計が毒舌よ  
説伏せられ淺慮も奸臣岩崎翠の逆謀も同意し即後見鳩翁侯より忠臣松倉丹下を失くんと  
ハ巧計より丹下の倅秀雄を連れ出さ放蕩者其名を附し且丹下に渠を勘當させんとハ所存な  
りしに反つて小登代が色香も迷ひ海野と謀りし大事さへ皆擲なして煩惱の犬武士となりた  
るゆゑ逸くも正義の松倉が教き眼も看破され小登代も含め計策の其色情も精神等はれ皆  
て岩崎翠より頼み來りし一通を堅く封ぎて懐中し上は神祕の二字を記えて天壽宮の守護  
札なりと云ひ觸せしを登代り疑ひもせて小登代も涉し昨日の目を遂げたりし其始末さ  
に更關まで酒を過え再た枕も就き前後も知らず臥したるが何やら狂がまき音の耳入り眼

を覺せば夜は頓も明け日は既も三尺を昇り只看れば松倉秀雄は捕繩筆に持ち立つてとりま  
た庭よは見なれぬ男が松倉の仲間勝平を縛し居たり伊東の絆の意外に駭き起さぬがらんと  
する處を秀雄は立寄り利腕把り逆臣岩崎へ同意の一個伊東甚之助を其始の爲り御後見ハ命  
を受け松倉秀雄向ふたり尋常も繩罹られよと道はれて胸且打撃げと故と面も憤怒を顯し道  
は心得ぬ捕方喚ひり不肖なまども伊東甚之助容易も繩目の恥辱は受けじまた岩崎を逆臣と  
は一切不審の言狀かちと詰れば秀雄は呵々ど打笑ひ此期も迨び彼是と陳立てこそ無益め  
れ爾りながら一應の悪事露顯の仔細を告げんと是より勘明おさくが出府し鳩翁侯へ訴へ出  
でし事また小登代は河窪孝太夫の娘にして志女吉と謀合せ曾て伊東の心腹を探らん爲り竟  
に肌を汚し神祕と云へる守護札を奪ひ之れを拾め岩崎よりの頼狀を手も入れし事また松倉  
の下僕勝平は岩崎よりの間諜と知りたる事其他船頭卯太郎及び駒勇ハ妹ハ長ハ河合また狸  
々徳と勝平の物語を志女吉が洩れ聞きしより遂に此の計策を施したる頼末を具も述べれを  
庭にあり見馴ぬ武士も伊東に向ひ吾もそ只今松倉様より話有し勘明なれ海野を始め江  
戸屋敷よめる岩崎一味の人々は獲らず縛し就きたれば只尋常も繩をうけ上の御沙汰を待

あされと道ふ折から一室を出づる小登代も伊東へ密謀の底を探らん其爲めは枕を替し受取りたる一蒲は直ぐは松倉へ手渡さしとてこと足下の悪事を知りたるなりと腹を立つれば基之助の今更も返す辭もあられに纏に予かゝりける恠て身連累一同は茅町の中屋敷へ繋ぎ置き廻つては國許へ護送の手續きよ鳩翁侯丹下秀雄等へ此處分よ付協謀と盡き速か又國許へ向け岩崎を捕縛し奸賊の根を斷つべしと鳩翁侯白駒出立に事決し其準備事ならるよ侍秀雄は一日小登代おさくお辰勘介卯太郎等を聚へ廻て久しき國會をさせ甲斐志願る其景状はくたくしければ記さす恠て此人々も証人なをばとて鳩翁侯の一行ども又國許へ發する事となり小登代の抱主へは松倉より充分の手當金を遣い纏て江戸表を出立したるは文久三年十一月上旬の事なりと

其五十

話頭後越石州道邊なる岩崎屋は妻花子と謀合せ津和野より近藤勘介と喚び寄せ伯父教員へ毒藥を服させ自滅させんとしたりしに其計策の當否の知らぬと教員は檀上の邊に死んでとりまた勘介は何處へ行きしか影だも見えず萬一毒藥を服ませしを知り訴人入出てし事もや

と擊い心を勞すきども花子の更も怖るゝ色なく道に我夫の御氣取もあられ御前かかむ御痴鈍乃那の勘介何れも然る心の注ぐべきか行方知れずにあつたるは全く妾に吩咐られ教員坊へ服しめたる藥此爲め苦むを看て自分は郎君や妾へ對て分疏なさに運定したけ別なしの舉動なれば決して御心配より及びますまいと云へば妾は揚からず伯父が常々肌身を顧さず吾へ諫めの証とせし密書守齋のあらざるは股も伯父より染に渡し江戸邸へ赴さしかも測られねば勢々油斷はなをへからず此うへは中止またる御殿の工事を取急ぎ終を一舉も行ふべしまた江戸邸の動靜は海野主計へ探偵をへまを申し送らん且先ごろ内意と合め同地へ遣りし勝平は目今松倉の下僕となり居るなれば萬一鳩翁侯を始め松倉等が吾を疑ふ事あらば早速注進あす苦ゆる附まで勞するほどよはわらねと嫌の穴より堤の境れ何怨せにいな老難しと了得奸智も長たる岩崎俄頃も鹿田屋忠五郎を呼び寄せ復度新御殿の工事も取急らせ曾て功利し架橋の機械を何かと協謀なま以前より人数を數百人増し晝夜を分たす建築せ老が素より金も糸目あき工事であれは斯ばかりの大事業あれと二月餘よして遂に成功なまたるゆゑ岩崎の欣び大方ならを此時までも心懸りなる彼の勘介の所在の知れぬと江戸邸

なる同志の者より何等の動靜も報じ來さぬは別に異條のなかりなるべし殊は先ごろ海野より鳩翁松倉父子とも自滅させるは瞬間と申し來りし事さへあれば然るまで勞する事もなし新殿落成のうへに日を撰ひ富丸君を請ふ術中に陥れ味方に就かぬ奴原の即坐に命を斷たんと腹心同志の輩を聚へ彈ての命課を定めしが茲に一ツの故障といふと此ほど其命より海岸防禦の爲め出張したる荒木寅之助並河帯川の兩人が日々富丸君の御機嫌窺ひとして伺候をせよと油斷ならざるものなれば且當日の兩人を避けしむるの計策を施ささんと當も悪事を談合す同志の者の退出したり情其中に彼の鹿田屋忠五郎と同人の乾分熊藏の兩人は這回新築落成の功を賞え物とらするとして留り置き嬖て奉夫婦が白粉給仕し嘉肴珍味の饗應をなま全く我大望の成就をさんとするも其方等功の莫大あれバ子々孫々至るまで此恩は忘却すまざと甘き辭を兩人の眞個と思へバ打歎びした、か酒食を志したる折から聊かながらと夫婦より褒美なりとて差出たせし黄金の包は彌よ目はくれ連々夫婦に謝辭と述べ誘籠らんと忠五郎の該金包を押藏きまゝ道は開る如何に苦と叫びて懇たしく血を吐き倒れ苦しむ其形狀を見るよりも駭き感ふ熊藏も忽ち五臟攪亂して同じく唇をわけながら吐血す

る忠五郎は同じ七顛八倒苦しむ廻り虚空を掴み死したるは惡事と興えて其惡人の毒手は解り空をく死す吁哉天罰と謂まくのみ兩個の死骸を暫りと見て花子はホ、と打頬をみ小賢しうても了得は剛人思ひの外を脆い奴吾夫是てまづ一ツの憂の雲の痕ひましたと道へバ拳も打點頭衆多の者に乾益とかまた元締とか稱さるゝ忠五郎ゆる大事をバ口外するとは思はねど下郎と口ハ善惡をしと卑俗に申す大事の前の小事と思へバ惘然ながら斯してしまへバ且安心此外工事は掛りし者と若殿御遊覽の濟まで宅へ歸さず城内へ一個も残らず留り置きたれば工事ハ秘密は知る者も少しイテ此うへは日を卜し富丸殿を釣出ださんアナ心地よや嬉しやと夫婦迭々隔き居たるは大惡無道の男女なりき

其五十一

單表岩崎肇の邸は養育る、少年の男女あり道ハ同藩津邊外記と云へる者の遺言よみて兄の道太師と稱ひ十五歳あり妹の名は妙と云ひ當年十四なり俱々其性伶俐なる上君よ仕ゆるは忠を以し友よ交際に義を以てするの道を辨へ父外記が病死の後母方の縁故より岩崎の邸に引き取られ教育をうけ居たるが曾て肇夫婦の事動も不審此事もあるされど叙敘と

も幼年ゆゑ奈何なる事とも心注ざりしは妙女の今日しも忠五郎熊藏の兩人が毒殺されし處を際越えより其駭きは大方ならず亦何ゆゑは此漢を斬る惨酷なる成敗ありしなるかと竊に静を立聴て始めて知りし逆意の頗末胸潰るゝまで仰天の思ひの同じ道太郎も今日大勢の集會は如何なる事か聴かまほしと給仕又出て其れどなく窺ひ知りし新御殿の巧も深き池の面に架けたる橋よて富丸君を弒し奉らん協議あるよと道ハ身からぬ御大事早速上へ注進せんと憚る心をまた信々思ひ願せば此事を訴人なしたる其時は岩崎夫婦は忽ちに重き感刑に罹るるべし爾ありし後の世の人がアレ見よ親津海道太郎の恩人夫婦を訴人まで手柄顔と誇居るハ小面の憎き少年かな訴へずともまだ外も思慮あるべきよと後指さるとまた不ずかしく父が御病死ありし後の牛の親も優たる大恩人の岩崎伊夫婦如何に御上の大事ありとて吾口より云て罪人に落とは義理を思はぬ仕方只あつて此ま捨置ときは御上の御身係る大事左も右も忠義を立て双方全たき事を計るは命を棄つるの外はあらとと稍く決心なし快々として吾部屋へ飯れば妹は柱ありて兄が物憂き顔色を見るより其と推せしか四下を窺ひ膝を寄せ毎又變りし御容子の故や母兄も今日の密議と「指は御身も懸

き議としか喚驚入つたる逆意の遂一只歎息の外はさし憚りて謀みし事あれば倒幼年の吾等如きが諫言あすとも今更に思ひ止まる人にもあらぬ爾れバとて訴人して思ひある夫婦と罪と被せんは素より快よからぬ業なり特に父が御遺言も吾が亡後は岩崎を父と思ふて仕へよと仰せの耳朶に存りあれバ何條訴へ出てくるべき只あつて黙して止む時の上の御身の大事ゆゑ忠義を立つるは一命を棄つるに如かずと覺期の極めの爾ハ生存父母は勿論吾亡時を吊はれよと道ひつゝ膝よはととと落る涙の餘數妙女は聲を曇らしながら今日まで知らぬ御夫婦が世に恐ろしき大悪謀演邊の家の礎とも云はるゝ御身でわりながら漸く浸まき企謀は全く天魔入魅入しなるべし妾も前兩個の者を毒殺ありし動靜を悉て直ぐよお諫言申さんと思ひはまたれど愁ひも大事を議りまど母兄の身よまで及ぶ御義はありもやせんかと思ひかへして来る廊下でまたも聴いたる悪事の遂一所詮諫めを容るゝとも採りあるどの思ひねば妾も死する覺期なれど其死するよも大死と云はれぬやうよ忠義が立たく聊か浮む妾が計策母兄のお氣よは協ふまなきが野夫よも功の者とか云へバ聽容れ給へと深よき妹が許に道太郎は能くあそ覺期を致れたる爾も然まて此決心なれば吾ハ附れる雲とて去去而て其

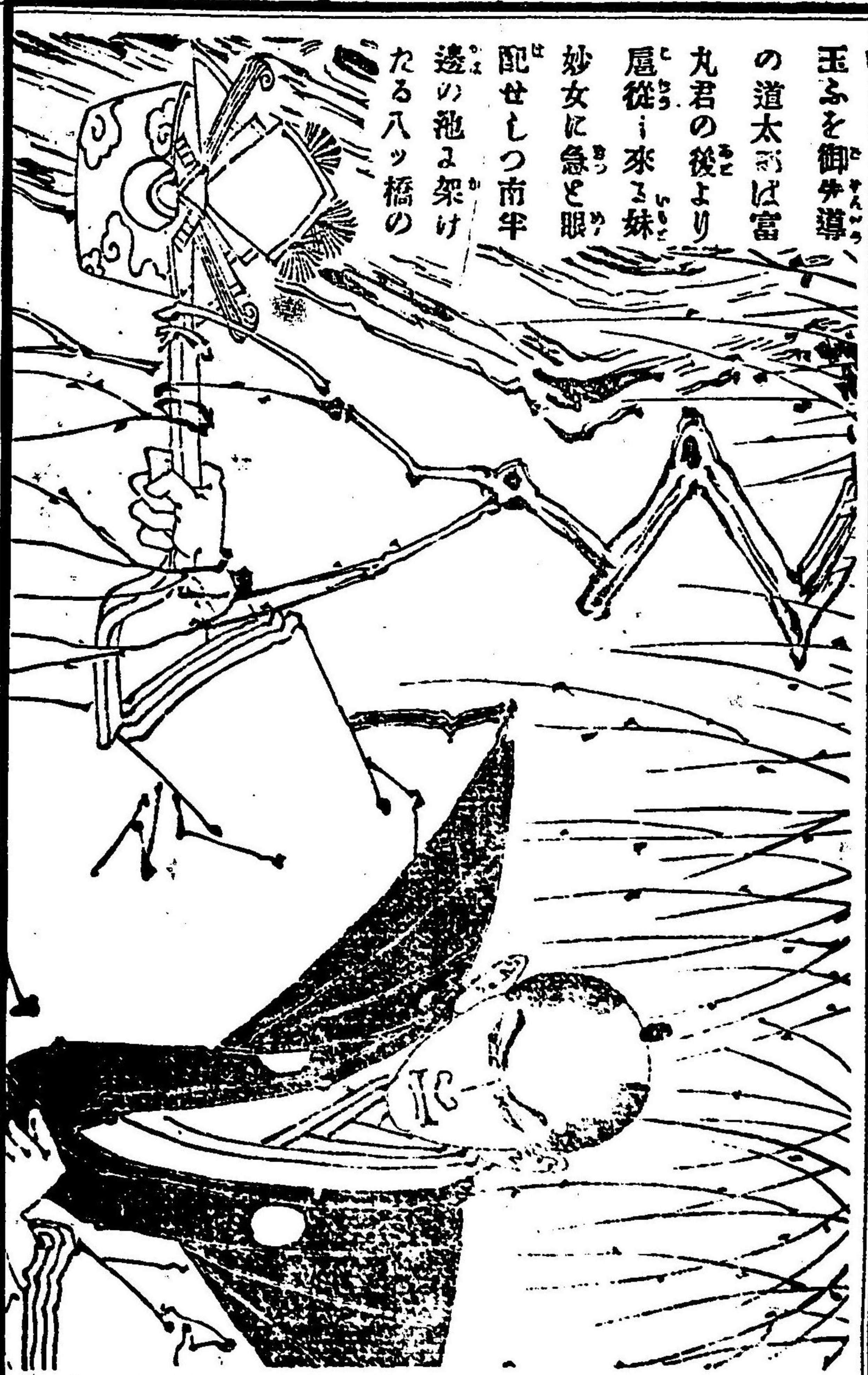
浮みし計策どの如何なる事か問ひかくれば妙女の尙も膝すり寄せ何か秘密吐きまに道太郎ハ打黙照れれど眞個は眞策なり努す油断したまふなど謀し合し、計策は开もまた如何なる事やらん後、至らぬ自然知るへま

其五十二

爾る程は岩崎肇は濱邊なる新御殿苑園とも工事落成の趣きを言上ま來る十五日を以て富丸君の親臨を乞ひたりけり抑も此新殿の建造爲体を配さん先南半邊は大なる池を穿り其四圍は盡く奇花異草を栽また該池にハ八ッ橋を架け池は沿てハ幾條も長堤を築き堤上は百歩一亭五十歩一舍あり兩邊ハ花未だ咲かねど桃櫻梅柳の類列び樹池中ハ湧濼ふ小船は龍舟鳳舸とも見ゆべき風のまよ／＼左行き右行きするうちを邸の駕籠の相成ふれて趁ふ似たり北半邊ハ一彎を穿りて海水を之ハ注ぎ入れ灣中ハ築立し山の蓬萊ノ擬へ構做またり樓臺は危ふきまで峻く登れば海外をも望むべく思はれたり備南北の仲間ハ大殿を造り其苑牆ハ瓦ハ輝耀きて琉璃とて背けるかど訝り壁は質密くて紫脂もて泥しかど疑がハる庭園ハ眞層なたる怪石ハ嶮々岫々として見る眼も最と奇く臺舎ハ結構たる奇材異料

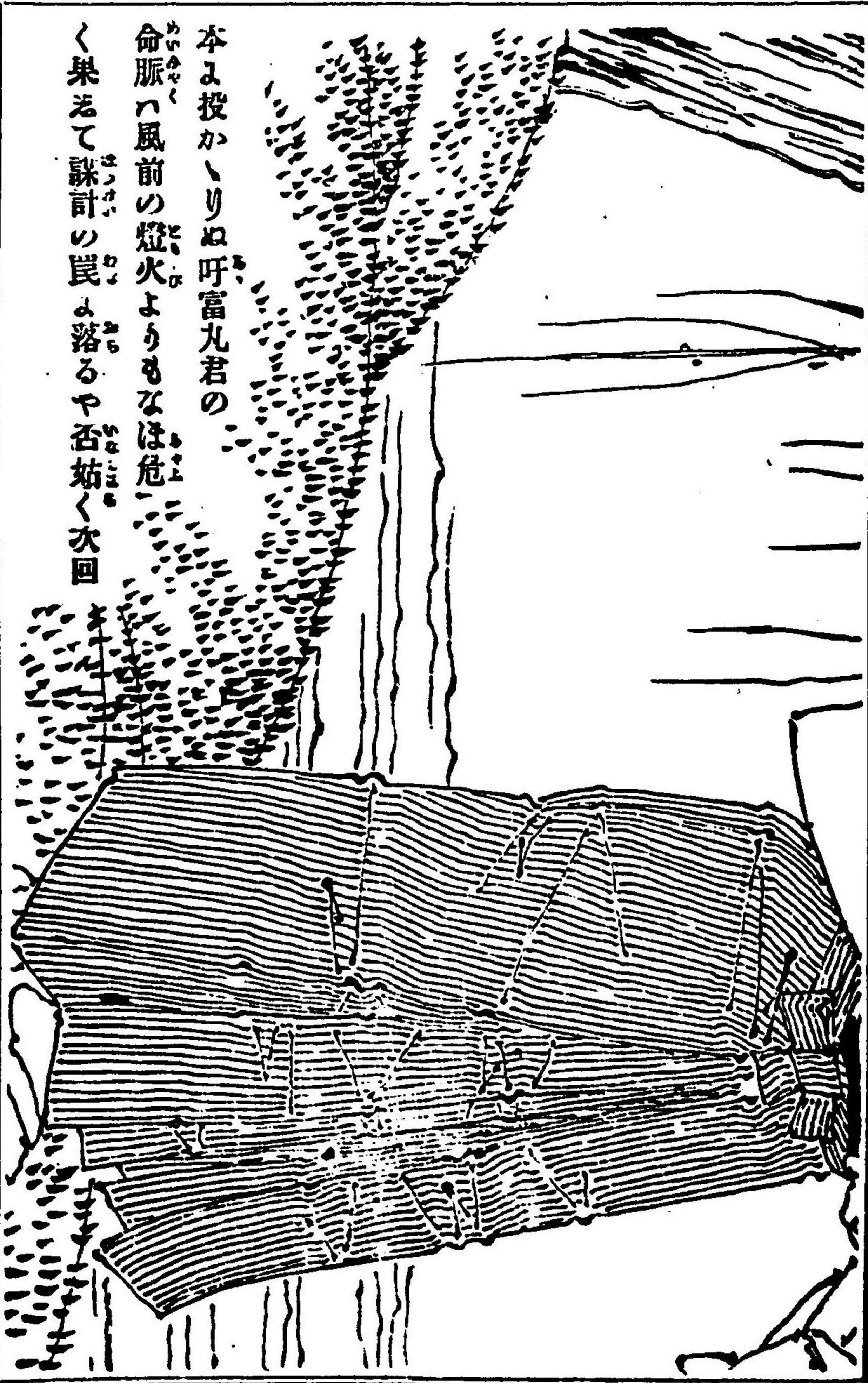
は若狀一帯の錦繡を曝し萬の物一として善ならざるハ亦く美ならざるハ不／＼寔ハ仙界も斯やあらんと觀客眼を驚かし聞者耳を聳ざるハ亦ま斯る宏大壯盛なる新殿を建築し、万圓の金を浪費したるハ這回の大望成就の後己が別館とあさん肇が所存ありき此工事中曾ても記せし八ッ橋の第三枚目に機械をなし富丸君が橋上ハ歩を進められし時橋下より土堤の中へ傳はり、針鋒を引くときハ忽ち機械の螺旋狀に主は池中へ陥入るなり、且以前に池中ハ上邊より水が流し落たる人の一口までも其水の喉眼ハ入れ、即生に命を斷つ俗にいふ兩天秤の眞零なれば富丸君の陥入られしを見て救はんとして飛入し、雲ハあるとても所詮助かるやうも亦き深き巧計と知られなり、恁て當日は彼江戸邸より來たり、荒木並河の兩人を避けまめん爲め、遂に海岸ハ於て大砲發の命を得、兩人ハ同場へ墜むべしと命を發せ、かど荒木一人、匠地に向へど並河は富丸君の下知よて當日の供奉ハ列したり、懸て辰の刻ハ本丸を御出門ありて程なく新御殿へ参賀ありまか、肇夫婦ハ御門前ハ於て奉迎し、先導ハ奥津邊道太郎なり、正殿に於て暫時休憩ありて卒聞及ぶ物數奇の肇が吩咐の、園の体をハ觀物すべしと座を起ち玉まひ深き計謀ハあるぞとは神ならぬ身ハ知べうもあらぬ、後々苑園ハ出て

玉ふを御舟導  
の道太るは富  
丸君の後より  
扈從に來る妹  
妙女に急と眼  
配せしつ南半  
邊の池は架け  
たる八ッ橋の



本よ投かゝりぬ呼富丸君の

命脈ハ風前の燈火よりもなほ危  
く果えて謀計の毘も落るや否姑く次回





の分解を竣つべし話頭轉題岩崎は富丸君が苑園に臨まれしを見るより豫て準備の毒水を長柄の銚子の裡に入れ手は携へて北邊りの枯柳の下に樹がくれしながら今や池中へ毒水を流さんとする此時怪しやさつと吹來る一陣の風は忽ち身は染まわたり五臓すまみて働か得ず是は如何よと思ふ折から柳の邊へ朦朧と立顯はれし異形の姿は了持の筆も愕然して只茫然たるばかりなり

其五十三

絆の奇怪に岩崎は吾もあらで銚子を持ちし其手を看れば這の仕生に何の程よか枯柳の枝より垂れたる糸が利腕の部を腕と結んでをり彌よ不思議と思ふ折から宛も瘦かれたる聲音にクア+嬉しや奸賊の謀計も最早是をききてあまよろこばまやと云ふかと思へばまた阿々と打笑ふて眼前に立顯はれし異形の姿は消て跡なく朦朧たる影さへ見ぬすなつたるが此時藥の全くの正氣は復せば憤然と志て岩崎筆とも云はるゝ武士が妖怪變化か障得の爲めに大事を懲り什損じての末代までの笑種あり非險障得をあさばあぜ开も何程の事か有んと云つゝ銚子の毒水を池中へ流し遷さんとするに銚子の中より一滴の水だまもく恰も拭ひとりま

如くなれば筆も復た脱きしが急度心を取り直しました室に入り舞水を調合なして居たりけり爾る程は富丸君の道太郎は導かれ玉ひ徐々苑園へ出て玉へは御背後よりの道太郎の妹妙女並河帯刃が附添参らせ道太郎は苑園の裡なる築山を指さま那れこそは蓬萊方丈瀛洲とて彼の海中に三神山を擬へたるものにて候ふなれ此池の面は昔より三河國にありと聞きま在吾の君がから衣きつゝ馴よしと詠み玉ひし入ッ橋の舊跡を摸して候ふ开も此工事の杜若の盛りの候に工を竣へあば草花の御眺も一層あるべしと筆も心を勞したる趣きも候へども工事の者も故障ありて暫中中止を志きたるゆゆ意外も落成運々なして暖國ながらも冬なれば池乃面も群れ遊ぶ鴛鴦の外も早咲ハ茶山牡丹の眺めのみ爾れと今日ハ空晴れて小春日和の海の面遠き帆艫近き漁船之れ等を御覽はまた興あり苑園の御遊は是はてよまて正殿の樓客へ成らせ玉へと申しわぐれば妙女も傍よと只今道太郎が言上奉りし如く庭の面をハ御歩行よりは樓に登りて海上を御眺遊ばさるゝよと御一興ならぬと頼り申すハ入ッ橋を渡らせ玉はぬやうと兩人が禁むる胸を譲り玉はねば富丸君ハ點頭玉ひ如何さま今日の好天氣も海面の眺望も一層なるべし爾も心も筆が心を勞しゝ此入ッ橋を渡らすてハ何やら遺憾

き心地せらる余は在吾の中將の如き歌人ならぬと此まゝも席を轉んは無風雅なり本渡るべし道太郎案内せよと曰ふよぞ奥津邊はいつと計り今の心を決まつ其身は先前に立ち次よ妹の妙を歩行せ其れより一間計りを離れて富丸君が歩をすゝめ玉ふ如く香土堤より架し第一枚目の橋の袂へ投かゝりよ他人の眼に注かねと怪しや側燈籠の下に据たる巖石の忽ち人の形と變て富丸君よ打向ひ頻よ首を掉る体あれど帯刀の勿論道太郎兄弟の眼よも注かず一個富丸君の眼よ注まりゆゑ素より柔弱なる性なれば打駭きて苦と云ひつゝ雨の袖よて眼を掩ひ行途をとゞまり立ち玉ひぬ

第五十四

他眼よ毫も見ぬども唯富丸君一個よは橋の袂の巖石が人の形と變



じつゝ領を掉りく行先を止むる如くよ思はるれば富丸君は歩を駐めて袖將て顔を掩ひ玉ふを動靜知らぬバ帯刀の君には如何遊ばされまかど問へバ稍く掩ふたる袖をかい除け四下を看玉ひ余の性得蛙を忌み畫けるものたは厭ふあるが那れ看よ橋の袂なる石の形ちの自然ら蛙の姿よ見ぬたるゆゑ思はず顔を掩ひしちり気分を最と悪ければ庭面の散歩は後よきて道太郎の云へるよ順ひ樓よ昇りて休息すべしと腫を轉し玉ふ折から懸導進らせし奥津邊兄妹と橋り二枚目よあとしが今富丸君の引返し玉ふを視て兄と妹よ道へるやう妙女曰君は御安泰に樓よ



向はせ玉ふなれば非除他策のあるとても帯刀殿が扈從を率り守護なすからい氣遣なし只懸念まきは此橋なり今や我々兄妹が忠義の爲めよ命を斷らば後世患を遺くべし覺悟をせよと云ひながら空と駆け行きて豫て聞く第三枚目なる橋板の裏なる樞を扱けバ過たず橋板の橋の中央より折れて兩個の池の中へ水音高く陥入つたり此時彼の鞍中に隠れく橋板の釘刺を引かんと待ち構へたる徒黨の漢の此爲体に打ち駭く思ひは同芝岩崎壁も迫彼方の樹陰も動靜如何よと窺ひをりしよ目的せし人は陥もせて奥津邊兄妹が樞を外し自射池中へ投じしゆえ其仰天も音ならず諸の疾も兄妹は吾が大望を洩れ聞きて怒る陣碼を命したるか情さも悪まど怒氣憤懣吾れを忘きて向ふの方より橋を渡りて四枚目の中央方りへ來たりしが哀れむべし兄妹の池中に陥て計略の毒を含み一事おれバ水底まで煩悶し怒り顔色變まつ一瞬間に絶命し死骸は稍く波に浮みぬ急變事に富丸君の御駭きより帯刀は情あそ子細いある別處油斷ならずと富丸君の御手を把つて守護をいつし側石へ投つけ火藥仕掛けの忽ちよ轟と音して焰々と登りたる信號の狼火スハ殿様の御身の上氣遣しきすと門前に窺ひぬたる荒木を始め江戸表より差廻されし人数は一同に苑園の邊へ最と嚴重に尿列んだり東道

は謀略の仕損じたるを遺憾と思へど故と素知らぬ顔色にて歩前最近く兩掌を突き少年輩が測らぬ疎忽に浮興を覺す耳ならず見苦しき体を見覽入れ 恐縮の外は浮座を候ふ向本寛典の浮沙汰ありて席を更め樓上は於ては休憩の程を願ままつるソレ黒川生浮執成とと巧計は露顯も苦よせぬ丈夫爾れども黒川は油斷なく君の浮意を窺ひしに富丸君も先刻より深く恐怖を懷き玉へバ今日は此まゝ歸城をべしと仰の下より黒川が浮供辯と令するよぞ彼の屈強の壯士們が護衛し奉り城内へ行列速く歸らせ玉へバ擊夫婦の宛然に掌中の珠を取られし心地すれど只得門前まで奉送し快々として席に飯れバ今日聚りし一味の者は孰れも精悍老く身準備を断出ださんとする体あるゆゑ遣は各君よは何事なるかと問ハバ一同意を頼へ何事なるかとは家老片辭ハども覺えず謀計露顯なしたるうへは追かけて富丸を刺殺し手向ふ奴們切つて棄て緯を一撃又決すべま遅々する時では浮座をまいと血氣を惱むと岩崎のまづ姑くと押禁めま後の話説ハ次回へ記さん

其五十五

壯士の惱むを押禁めて壁は徐よ遣へるやう今日の巧計の書解風しは奥津邊兄妹が小賢の事

動よればあり爾れども此後富丸を亡ぶ計謀は何程もあれバ今嚴重に守護なし歸るを迫  
 り行きて暴擧及ぶは最も策の得たるものよわらず努々憚る處よわらず不肖ながらも聲の  
 指令を御待のれと自若たる辭は壯士も踏出す脚を止まりし後頼を合せ聞許數刻あしたるう  
 へ各々自邸へ立歸りぬ恠て翌日岩崎聲は前日の汚濁を申しあげんと己の刻頃登城あししよ  
 富丸君の拜謁を賜ひ別殿の工事も就てハ一層の心勞過分なりと汚沙汰ありしかバ聲は面目  
 身も餘り有難き旨を汚受し必の裡と思ふやう恠る上意のある限りハ八ッ橋の密謀心注ぎし  
 にはわらざるべし奥津邊兄妹の構死は全く過ちと思ふやらん首尾よかりまど欣ひて汚前を  
 下り長廊下を四五間計り來りし折から思ひがけなき左右の襖を押し抜け突と立願れし用人の  
 壯士の岩崎が前後を圍み聲をかけ。岩崎聲へ汚糾問の筋あり政廳の御所まで参るべしとの  
 上意也と道ハ壹個は聲を亞き拒み立てして願はずバ繩かけ來よとハ願合あるぞと不意に出  
 てたる体爲に聲も措はど駭きしが聲も怖るゝ色ハあく上意とわれバ睡んで何處へありとも  
 參らんが當國ハ藩士中よ見馴ぬ顔の足下衆斯る場席へ進入したるハ上士以上の者なるべし  
 夫共中士の身分の者か且姓名を聞かされば同輩致す筋はなまど道はれて兩人は打點頭は廣



間最近く来りし余情泳には未だ一面諒だも致し、事なき岩崎筆疑惑は左も有べけれ余は  
 江戸邸定府れ士大久保行之助の子息撰一郎小山伊織の長男伴左門なりと聞くより筆は必  
 ん駭き大久保小山兩人は鳩翁侯の肱股の臣よて曾て本家より乃附添人なるが如何なる事  
 て毎の程歸國きたるか訝しやと思へど此場て問ひもならねば胸を定めて兩人ともは亂所  
 殺て赴きけり有恚べきとは努知らぬ岩崎の妻花子ハ昨日の計謀を仕損じしを最と遺憾く思  
 へどもまた今更に詮きければ道太郎兄妹の死を憫みいせて太く惡み死體を路外へ棄させて  
 切の腹を愈ししと思ひ居たるは寔に淺間しき極なれど誰とて諫る者なかりき折から筆の伴  
 赤して登城したる仲間が遽だしく立歸りて旦那様よは今日登城の上殿様への御拜謁済  
 み御退殿の御侍尋問の筋ありとて其まゝ調所へ御廻しとなり只今纏まかへり玉ひよし又  
 御徒士の衆一同も揚屋へ入れられ我々耳の辨ふしと申し渡されたるが承まはる處よて江  
 戸表より御後見鳩翁様が昨夜御入國ありて何か御糺問がはじまるこの事よて昨日新御殿へ  
 御給仕侍手傳は御臨なりし方々は追々纏まかへり御城内へ引致さまりましたゆゑ急ぎ此段  
 御注進を仕つります侍も旦那様の御身の御動靜聞き糺して参るべしと云ひ給て引返ししゆ

ゑ花子ハ駭き一方ならず情あそ惡事は露顯したれ特よ鳩翁侯が密の入國今朝も到つて不  
 意よ若手をしたるからは充分手廻しあつたる事よて最早此の道はわらぬ此うへは繩目の恥  
 辱をうけんより妾も左近將監の妹なり郁之助を刺殺せ潔よく自害をせんぞ豫て豫期をま  
 だるよかお兒を抱きて樓よ登るよ技は佛室に繕ひありて櫛子を外せば他の人の見るべき様  
 もあらず花子は臆て佛室に向ひ回向をすまて準備の短刀片手に持ち郁之助を膝の邊へ坐せ  
 く顔つれくんと暇遣りながら涙に曇る眼をしばたゝきて开も何事を云ひ聞かすか次ある回  
 を看て知らん

其五十六

登時花子は郁之助の顔打暇遣り涙ながら。爾ハ正しく前の濱邊の城主左近將監殿の甥と  
 生ながら従弟同士の富丸の臣下とあさんは朽惜しく何卒濱邊の家名をば相續させんと思  
 ふより父公とゝもに富丸を滅ぼんとせし謀計も遂に露顯となりたるあり素より幼稚の那の  
 富丸是まで殺害せるの機は度々なれど變死させてハ家中の疑惑反て爾の代とあつて二心を  
 懐く者あらんと其れや是やを思ひ過志新に造りし別殿の池よ架したる八ッ橋の毀けて死し



あは其時こそ工事の者の不注意を咎めて普請に干渉し人夫を獲らず死刑となし忠を擧ひ血筋を云ひ立て直ぐに爾を城内へ乗り込せんと企謀を渾て謀合も鳩の背を喰違ふたる夫婦が大望良人は縄目も罹りしとわれは今にも母子を捕へんと逮捕の向ふは必定期を妻も左近將監の妹忌のしき縄も罹らんより爾を刺して妻をまた此場で自害なを予かし親子は一世と聞くなれば是か今生の顔の看をさめ爾もよても果報拙き爾がうへよてありけるよと膝も抱あけ顔をわて氣丈の婦人も恩愛の別れの涙のら〜と禁め兼てぞ見えよける折のら僅しき人の脚必定逮捕と氣を取り直し泣き入る吾子を膝よて壓へ口も稱名右手には短刀胸を定めて眼を閉ぢ咄嗟郁之助が咽喉の邊を刺したる後の方よりヤレ須臾と聲をかけ花子の利腕腕と把るを駭き看れば思ひがけなき鳩翁侯よてありけるゆゑハツと計りよ仰天の膝のゆるとよ〜へられし郁之助をバ突と寄りて抱き取りまの帯刃なり其時鳩翁侯は花子よ向ひ血縁は私軍卿は正ま〜く國家の罪人恚事よてもあらんかど自身も馬を向けたるなるが四方ハ惜子を断ち此樓へ登り居たるは自殺乃覺期と推ま〜ゆゑよ裏手より櫓子をかけて登り來まが案違はぬ此場の体輕からの罪を犯まがら自殺せんとは重々不屈また勇盛なる部之助を刺さんなき〜は無分別左よも右にも鳩翁が計らふ胸もあなるなれば必ずともよ死を急がれあ母子とも〜我邸に整えて沙汰を待あそよけれ壁と〜もよ獄裏よ繋ぎ糺問あすべき等なれと富丸君より花子あそ正しく伯母君の事あれバ鳩翁よきに計ふへしと仁徳籠れる上慮よ獄に繋がず吾自邸へ拘監等にてあるなれば許々不所存なる事ありて上意よ悖る事あかれと最と仁慈ある鳩翁侯の辞は花子は死にもならずまた手向ひも出來ざるよ予但獄念たる計なりしが毫も早く鳩翁侯の指令よ心得黒川は準備の橋戸昇入れさせ母子別々乗遣らせ自身之れを護衛なし鳩翁侯乃自邸なる下の町へぞ急がせける恚て鳩翁侯ハ岩崎の召傭は夫々の宿へ引下らせ邸内へハ守護の者を置き且先おろ工事よ關係志て城内よ止め置き外出と禁ぜられぬ人夫數百人を引出し抑も鹿田屋五郎より雇入れられ工事落成の御酒を下さる〜と云ひ觸し殘らずを城内へ入る其ま〜留め置かれしまでの顛末を口供よ連印させ國筋の事情充分に探索の行届きしゆえ纏て十一月三十日に至り壁を調所へ喚び出し鳩翁侯自身糺問さる〜其趣きハ且繪様顯すものから次回よ記さん

其五十七

政廳糺彈所の正副又は御後見鳩翁侯出席有列座の諸士は荒不虎之介並河帶刀田邊又太郎其  
 他岩崎が爲に謹慎或は整居杯し付られし當家譜代八忠臣等鳩翁侯入城のうへ其誣を解れ  
 出動せし人々等あり馳て岩崎華を拘留所より引出し一段低き様側へ据たり華は先頃登城の  
 儘取押とあり當日一應の尋問ありし雖も存せぬ知らぬと主張し更な伏する体なき故充分  
 是證據を示し招丁させんと今日まで何等沙汰もなかりしなれど爾る計較のありきは知ら  
 す畢百斯く糺彈の逶延するは證據の無き苦みて困却なすと覺たり今日ハ鳩翁直々糺彈を  
 すと聞々バ一々論破去坊主首は閉口させて呉んずと怖るゝ色なく揚々と繩着のまゝ坐し  
 たり少時ありて田邊又太郎は席を進ませ華に向ひ先頃一應尋問及びまがと國家を横領せ  
 んどぞの企謀なすと陳じたるが如何にも汝が横領するの企謀なくとも恐れ多くも鳩翁主  
 を弒志奉り一子郁之介を御養子と稱し乗込ませんと夫婦共謀なしたるうへ同志と慕り徒黨  
 を與しは之の叛逆の顯然たる者にて今更謀々陳するより迨はず眞直に伏罪仕つれと進へば華  
 ハ片頬に笑み道い仰々しき鳩翁問か岩崎華は鳩翁家の譜代先祖代々分外なる秩祿を頂戴  
 し特に小可へは恐れ多くも鳩翁先代の令妹を降嫁せ玉ふの光榮を帯び家門の繁盛を極めし身

よして何を不足し野心の企謀あるべき様も候はす之を全く華夫婦を嫉む輩の謔言よして怨  
 害なしたる事なるべし爾るを態々御後見が御入國ありての糺彈は近附恐れ入つては座り  
 ままると自若とまたる答辨を鳩翁侯に聽取りて徐々華へ打向ひ前左近將監殿の寵を蒙り父  
 主殿死去の後ハ幼年ながら執政の上席とあり劇さへ君妹降嫁の光榮を蒙むる其莫大なる君  
 恩を忘れ野心の企謀をすやうきしとは寔に爾もあるべき事ありき爾れども遠れぬ罪狀の顯  
 然たれバ口實しく抗辨なすとも天理といふ鏡よかけて照す時は背て陳する道あらんや今一  
 々尋問する證據は向つて盛く厭厭なすべき辨論あらば隠遁なしたる鳩翁が今日よりして  
 後身を辭し區政渾て汝も委ねんし又太郎証問かせよと下知は田邊ハ畏まり側へは置し手  
 文庫より把り出たしたる數冊の書卷を抜き下すハ第一ハ華が石川にて道乃を奪はれし  
 手紙第二ハ近藤勘介が口訴狀第三ハ河窪の下女おさくの口供第四ハ齋藤師彌之助の妹お辰  
 及び同藤卯太郎が手續書第五ハ岩崎が若黨藤平狸々徳の口狀第六ハ柳橋の藝妓志女吉河窪  
 の娘登代事小登代が口狀第七ハ伊東甚之介の口供第八ハ海野主計の口供第九ハ松倉秀雄が  
 探索の手續書第十鳩翁侯入國以降捕縛されま華一味共者の口供及び工事方數百人の口供等



なり此十通の證據書類を對し辨解の道あらば陳述すべしと最嚴重に讀み聞かせば事も期ま  
 て探索の行届きしとは思ひがけねば向んと辨解すべき様なく但默念と若俯向玉なす汗を額  
 より垂る、計りの風情なれば鳩翁侯と辭を柔け「ヤヨ榮汝は遠き伊達家の甲斐近くの仙石  
 家の右京の徹を踏む覺期もてもあらざるべけれど一朝謀計露顯なしなば豫て覺期もあるべ  
 きよ今とあつて未練も抗辨せずは卑法なるべし女ながらも汝の妻の了得よ左近將監殿の  
 妹ほどありて罪の餘末を逐一余まで自首なし沙汰を待ちぬ其れは汝は毎までも手紙をか  
 けて伏罪せざるを大に夫とも思ふ癖もあらんか飽きて上へ抗抵し祖先へ不幸と思はざる  
 不忠不孝の身とあるの开を亦汝が決心あるかと深き仁惠八合畜たる其一言よ岩崎の思はず  
 ハツと首を低げ骨をひしがれ身體よ非除鉛の熱海を渡がるゝとも伏罪せず獄裡よ斃れん決  
 心なり老が妻か自白をまゝと云ひ殊よは侯が今の一言拷問よりも骨やも徹へて恐入りま  
 する此上は逐一了するまでもあし天の身さぬ再罪惡速かよ浮處分あるべし偏も願ふは妻  
 子等へ但寛典の沙汰をばと素遣不敵の岩崎壁もホロロと翻す一滴の涙のうちハ奈何なら  
 ん千萬無慮の含著あるべし

其五十八

(大團圓)

鳩翁侯が權謀の一言との知らず妻花子が自白し、この事を知り且は家名の廢絶を悼じ仁慈  
 の辭に岩崎壁は抗辨せずべき氣勢も掛け遂に服罪をたりしかば當日詮議を了り復慶同人は  
 獄に下らしめ當日よりして庶人の取扱ひをなさまめ是より處分の協議を尽し、又孰れも天  
 地も容れざるの大罪人あれば磔を行なふこそ至當ならめとの議論湧出せりと鳩翁侯ハ之を  
 容れず未だ其志しを遂たるよもあらず特よ前君の寵愛からざりまを以て宜しく一等を減  
 するよを當代に厚德なるべけれど竟よ首謀岩崎壁は獄門に處する旨を評決を罪狀を添へ月  
 番の閹老へ上申よ追ひけり恚て同人乃妻花子は同領卒登嶋へ流罪よ決一子郁之介は其罪  
 を問ずして鳩翁侯の請願よより是を津和野西休寺よ送り僧となま近藤勘介は更に中士分よ  
 取立られ若干の秩祿を賜ひ松倉秀雄が媒介となり彌之介の妹たつを妻に迎へし由連は追よ  
 後の話説あれど因よ記すまた河窪の娘登代へは更よ父の家名相續を命ぜられ書のかく家  
 祿を賜り之れよは同藩中ハ某甲を嫁と一其他駒勇の盡忠を賞し祭神料として巨多の金銀を  
 り同家はあさくが相續し其他岩崎一味は者ハ夫々罪を糺して輕重よ處し善人への報賞ハ

恩典あり濱邊の家門鞏固の基礎を定め、折から江戸表より壁の死刑を許可されまを以て獄より引出去刑檻の下に脆くも刀の露を消て首級は野外に棄さるゝ身となりしは爾に出て、爾より販る悪業茲に報ひしなれど之れを觀んとて聚ひま者は先ごろまでも家門榮え宛も權威を逞しうせし岩崎肇が身の果なるかと其應報の免がれ難きを評して己を戒めたりとす此獄全く終しは文久三年十二月の末なりと聞ゆえ然るゝ如何ある譯ありまか同藩と於ては此事件を深々秘し殿領内は民にして他人へ洩らす者あるときは嚴刑に處せらるゝの規則を觸示しゆえ知人逆は稀なりしが本年は彌之助が三十三回忌に當るを以て同村の有志者が謀り同人の勿論駒勇等の爲め大法會を修行し又人口は増灸する此事歴の實説を編み長く香花院に存せ置かんとす計較より跋扈し其の鎮末を物語りまを傳へ聞かまゝ筆にうつして恣長々しく記載はしつれゆ憚る所ありて藩名の省きわれバ聊かも足らぬ心地もあるへけれど開の條例のあるありてまゝりし偏り御推諷あらん事を希がふ耳

濱邊の荒濤終

明治十九年七月廿九日出版御届

全 年八月 出版

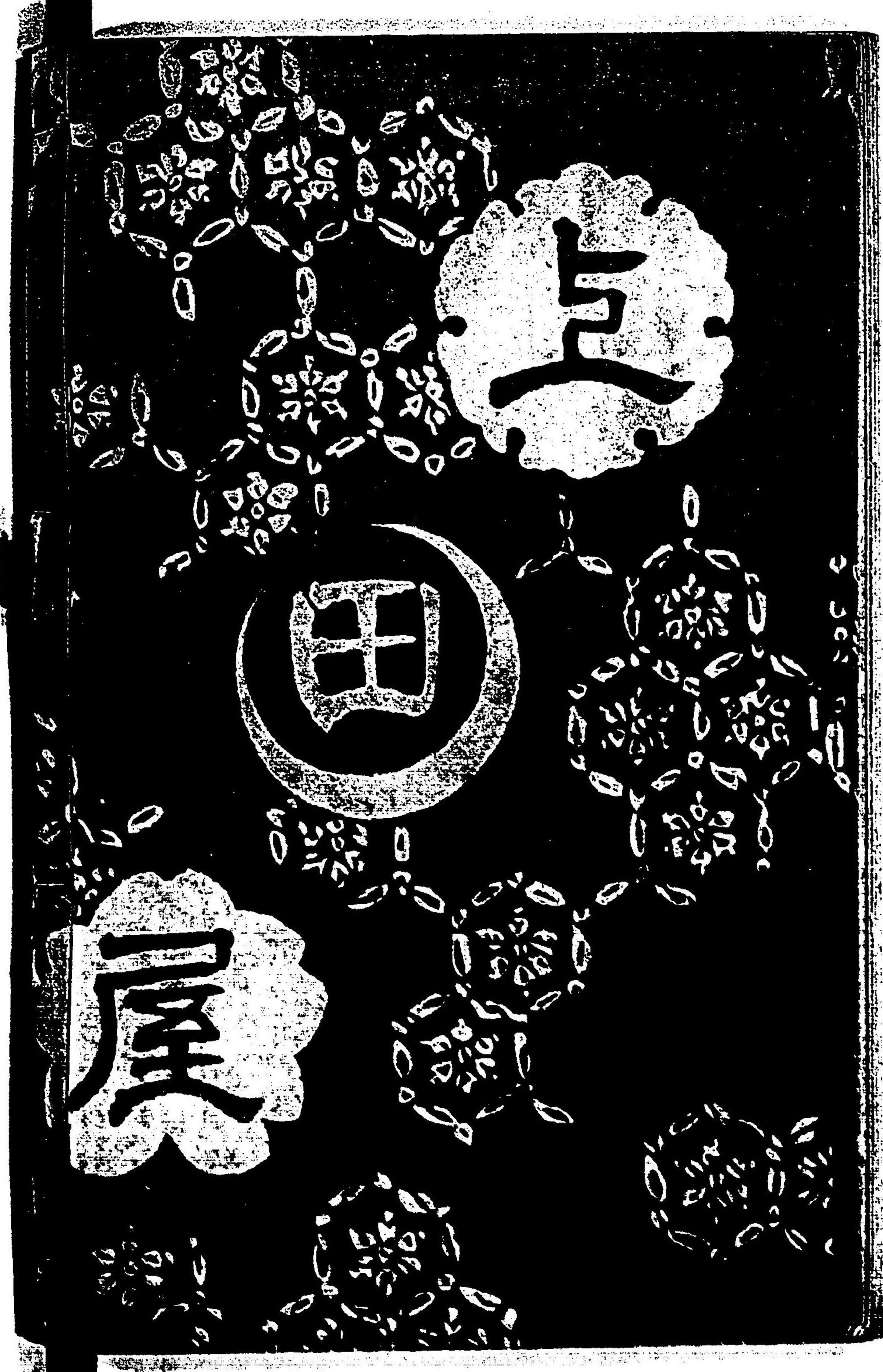
定 價 金 九 十 錢

新 瀧 縣 平 民

編 輯 兼 出 版 人

覺 張 榮 三 郎

日 本 橋 區 本 石 町 二 丁 目 十 六 番 地



田

田

風